〝今〟を生き抜くための102冊

by SEALDs

“今” を生き抜くための 102 冊

ここに選書した 102 冊の本は、“今” と向き合い、考え、他者と話し合うために、この社会に生きる人々と共有したいと思った本たちです。学生たちが 6 ヶ月に渡って話し合いを重ねながら、数百冊の候補の中から選びました。

この社会は、たくさんの問題を抱えています。それらの問題は、私たちの暮らしに大きく影響します。しかし、私たちは「自己責任」という言葉によって分断され、社会的な問題を前に、ひとりぼっちです。

もっとこの社会のことを考えたい。もっとお互いに話し合いたい。本を読み思考することは孤独な行為です。しかし私たちは本を通して、他者と世界の見方を検討し、問題意識を共有し、語り合うことができます。

選んだ本は、10 のテーマに分け、一冊ずつ書評を書きました。ぜひご覧下さい。そして、読書会などを通じて、さまざまな人がつながるきっかけに、この選書がなれば幸いです。

自由と民主主義のための学生緊急行動（SEALDs）
SEALD s 選書班

政治	1	『丸山眞男セレクション』	丸山眞男 著 ; 杉田敦 編
	2	『政治の眼力―永田町「快人・怪物」列伝』	御厨貴 著
	3	『右傾化する日本政治』	中野晃一 著
	4	『私たちの声を議会へ―代表制民主主義の再生』	三浦まり著
	5	『職業としての政治』	マックス・ヴェーバー 著 ; 脇圭平 訳
	6	『権利のための闘争』	イェーリング 著 ; 村上淳一 訳
	7	『政治的なものの概念』	C. シュミット 著 ; 田中浩 , 原田武雄 訳
	8	『自由』	齋藤純一 著
	9	『〈私〉時代のデモクラシー』	宇野重規 著
	10	『ポスト・デモクラシー―格差拡大の政策を生む政治構造』	コリン・クラウチ 著 ; 近藤隆文 訳
憲法	11	『憲法主義―条文には書かれていない本質』	内山奈月 , 南野森 著
	12	『憲法［第六版］』	芦部信喜 著 ; 高橋和之 補訂
	13	『赤ペンチェック自民党憲法改正草案』	伊藤真 著
	14	『安倍流改憲に NO を！』	樋口陽一 , 山口二郎 編
	15	『集団的自衛権はなぜ違憲なのか』	木村草太 著
	16	『立憲主義について―成立過程と現代』	佐藤幸治 著
	17	『憲法 9 条の思想水脈』	山室信一 著
	18	『日本国憲法の誕生』	古関彰一 著
	19	『憲法と沖縄を問う』	井端正幸 , 渡名喜庸安 , 仲山忠克 編
	20	『憲法とは何か』	長谷部恭男 著
生活	21	『生活保障―排除しない社会へ』	宮本太郎 著
	22	『反貧困―「すべり台社会」からの脱出』	湯浅誠 著
	23	『現代日本の生活保障システム―座標とゆくえ』	大沢真理 著
	24	『健康で文化的な最低限度の生活』	柏木ハルコ 著
	25	『ブラック企業 2 ―「虐待型管理」の真相』	今野晴貴 著
	26	『保育園義務教育化』	古市憲寿 著
	27	『老い衰えゆくことの発見』	天田城介 著
	28	『人間の安全保障』	アマルティア・セン 著 ; 東郷えりか 訳
	29	『定常型社会―新しい「豊かさ」の構想』	広井良典 著
	30	『被抑圧者の教育学』	パウロ・フレイレ 著 ; 三砂ちづる 訳
戦争	31	『本当の戦争の話をしよう―世界の「対立」を仕切る』	伊勢崎賢治 著
	32	『平和と安全保障』	鈴木基史 著
	33	『国際政治史』	岡義武 著
	34	『日米安保と自衛隊』	遠藤誠治 責任編集
	35	『核兵器を禁止する』	川崎哲 著
	36	『沖縄が問う日本の安全保障』	島袋純 , 阿部浩己 責任編集

	37	『戦争プロパガンダ 10 の法則』	アンヌ・モレリ 著 ; 永田千奈 訳
	38	『〈テロル〉との戦争—9.11 以後の世界』	西谷修 著
	39	『安全保障という逆説』	土佐弘之 著
	40	『権力政治を超える道』	坂本義和 著
記憶	41	『荒れ野の40年—ヴァイツゼッカー大統領ドイツ終戦40周年記念演説』	リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー 述 ; 永井清彦 訳
	42	『[新訳・評注]歴史の概念について』	ヴァルター・ベンヤミン 著 ; 鹿島徹 訳・評注
	43	『批判的想像力のために—グローバル化時代の日本』	テッサ・モーリス = スズキ 著
	44	『日本の政治と言葉〈上〉—「自由」と「福祉」』	石田雄 著
	45	『沖縄戦が問うもの』	林博史 著
	46	『写らなかった戦後 — ヒロシマの嘘』	福島菊次郎 著
	47	『日本とアジア』	竹内好 著
	48	『戦争は女の顔をしていない』	スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ 著 ; 三浦みどり 訳
	49	『ビヒモス — ナチズムの構造と実際』	フランツ・ノイマン 著 ; 岡本友孝 , 小野英祐 , 加藤栄一 訳
	50	『ホロコーストからガザへ — パレスチナの政治経済学』	サラ・ロイ 著 ; 岡真理 , 小田切拓 , 早尾貴紀 編訳
社会	51	『ぼくらの民主主義なんだぜ』	高橋源一郎 著
	52	『生のあやうさ — 哀悼と暴力の政治学』	ジュディス・バトラー 著 ; 本橋哲也 訳
	53	『[新版]ブランドなんか、いらない』	ナオミ・クライン 著 ; 松島聖子 訳
	54	『現代奴隷制に終止符を !—いま私たちにできること』	ケビン・ベイルズ 著 ; 大和田英子 訳
	55	『ネットと愛国—在特会の「闇」を追いかけて』	安田浩一 著
	56	『福島の原発事故をめぐって—いくつか学び考えたこと』	山本義隆 著
	57	『秘密保護法何が問題か—検証と批判』	海渡雄一 , 清水勉 , 田島泰彦 編 ; 西谷修 [ほか] 執筆
	58	『物騒なフィクション—起源の分有をめぐって』	フェティ・ベンスラマ 著 ; 西谷修 訳・解説
	59	『写真集ひきがね—抵抗する写真 × 抵抗する声』	ECD 文 ; 島崎ろでぃー 写真
	60	『アウシュヴィッツは終わらない — あるイタリア人生存者の考察』	プリーモ・レーヴィ 著 ; 竹山博英 訳
未来	61	『私には夢がある—M・L・キング説教・講演集』	マーティン・ルーサー・キング 著 ; クレイボーン・カーソン , クリス・シェパード 編 ; 梶原寿 監訳
	62	『永遠平和のために — 啓蒙とは何か : 他 3 編』	カント 著 ; 中山元 訳
	63	『世界史の中のパレスチナ問題』	臼杵陽 著
	64	『あの人と和解する』	井上孝代 著
	65	『「存在の現れ」の政治 — 水俣病という思想』	栗原彬 著
	66	『独立国家のつくりかた』	坂口恭平 著
	67	『一般意志 2.0 — ルソー、フロイト、グーグル』	東浩紀 著
	68	『公衆とその諸問題 — 現代政治の基礎』	ジョン・デューイ 著 ; 阿部齊 訳
	69	『脱成長 (ダウンシフト) のとき—人間らしい時間をとりもどすために』	セルジュ・ラトゥーシュ , ディディエ・アルパジェス 著 ; 佐藤直樹 , 佐藤薫 訳
	70	『ツァラトゥストラかく語りき』	フリードリヒ・W・ニーチェ 著 ; 佐々木中 訳
思想	71	『現代思想の教科書—世界を考える知の地平 15 章』	石田英敬 著
	72	『ニーチェと哲学』	ジル・ドゥルーズ 著 ; 江川隆男 訳
	73	『切りとれ、あの祈る手を —〈本〉と〈革命〉をめぐる五つの夜話』	佐々木中 著
	74	『他者の苦痛へのまなざし』	スーザン・ソンタグ 著 ; 北條文緒 訳
	75	『精神史的考察』	藤田省三 著
	76	『人間の条件』	ハンナ・アレント 著 ; 志水速雄 訳
	77	『明かしえぬ共同体』	モーリス・ブランショ 著 ; 西谷修 訳
	78	『ロルティ伍長の犯罪 —〈父〉を論じる—ピエール・ルジャンドル第 VIII 講』	ピエール・ルジャンドル 著 ; 西谷修 訳
	79	『フェミニズムの政治学』	岡野八代 著
	80	『カタストロフからの哲学—ジャン=ピエール・デュピュイをめぐって』	渡名喜庸哲 , 森元庸介 編著
子ども	81	『びりっかすの神さま』	岡田淳 作・絵
	82	『ぼくはくまのままでいたかったのに』	イエルク・シュタイナー 文 ; イエルク・ミュラー 絵 ; おおしまかおり 訳
	83	『紅玉』	後藤竜二 文 ; 高田三郎 絵
	84	『そして、トンキーもしんだ』	たなべまもる 文 ; かじあゆた 絵
	85	『ぼんぼん』	今江祥智 作
	86	『ミリー—天使にであった女の子のお話—グリム童話』	ヴィルヘルム・グリム 原作 ; モーリス・センダック 絵 ; ラルフ・マンハイム 英語訳 ; 神宮輝夫 日本語訳
	87	『本泥棒』	マークース・ズーサック 著 ; 入江真佐子 訳
	88	『チポリーノの冒険』	ジャンニ・ロダーリ 作 ; 杉浦明平 訳
	89	『道はみんなのもの』	クルーサ文 ; モニカ・ドペルト 絵 ; 岡野富茂子 , 岡野恭介 共訳
	90	『僕は、そして僕たちはどう生きるか』	梨木香歩 著
文化	91	『知の広場—図書館と自由』	アントネッラ・アンニョリ 著 ; 萱野有美 訳
	92	『オリジンから考える』	鶴見俊輔 , 小田実 著
	93	『文化 = 政治』	毛利嘉孝 著
	94	『文化と帝国主義〈1〉』	エドワード・W・サイード 著 ; 大橋洋一 訳
	95	『GO』	金城一紀 作
	96	『動物農場—おとぎばなし』	ジョージ・オーウェル 作 ; 川端康雄 訳
	97	『苦海浄土—わが水俣病』	石牟礼道子 著
	98	『アラブ、祈りとしての文学』	岡真理 著
	99	『想像ラジオ』	いとうせいこう 著
	100	『ヒップホップの詩人たち』	都築響一 著
📢	101	『民主主義ってなんだ ?』	高橋源一郎 , SEALDs 著
	102	『SEALDs—民主主義ってこれだ !』	SEALDs 編著

1

「政治」と付き合う

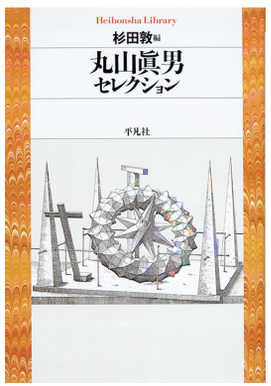
1　「政治」と付き合う

「政治」と聞くと、難しく、ごつごつしていたり、気持ち悪くて接したくないもの、といったイメージがあるかもしれない。しかし、だからといって私たちが「政治」というものから逃げられるかというと、どうやらそれもできない。「政治」は私たちの暮らしに密接しているからだ。結局、私たちは「政治」というものと、上手く付き合っていくしかない。この10冊は、戦後71年目という時代を意識したうえで、この国の政治との付き合い方を学ぶためのものだ。

01 『丸山眞男セレクション』

政治

丸山眞男 著 / 杉田敦 編



平凡社ライブラリー
2010年

“大衆運動のゆきすぎというものがもしあるとすれば、それを是正していく道はどういう道か。それは大衆をもっと大衆運動に習熟させる以外にない。”——p.102

「戦後民主主義」とか何とか言われるけれど、今の政治状況を考えるのならば、避けては通れない偉人が少なくとも一人はいる。丸山眞男。戦後の政治学をリードし、「夜店」のなかで人々の政治的判断を説き、何より彼は日本政治思想史のクラシックであった。

あれから71年が経ったけど、まだ何も古びちゃいない。日本の思想に寄り添い、彼は民主主義を日本語で語った。民主主義を私たちのものにする、そのための第一歩として。　/SOB

02 『政治の眼力—永田町「快人・怪物」列伝』

政治

御厨貴 著

文春新書
2015年

“マジョリティーを動員しようとする気負いと自信が生じた途端に、その緊張感と距離感がなくなり、実は安倍は、次の一手を見失うのではないか。”——p.54

本書は、安倍晋三や菅義偉、石破茂から岡田克也など、「災後」という時代状況を生きる政治家たち２５人に注目した評論である。

著者はオーラル・ヒストリーの第一人者として名高く、その筆さばきはもちろん、文章の一つひとつを見れば、同時代を生きる政治家を語ることの難しさがひしひしと伝わってくる。彼らもまた「人」なのだ。我々の政治を見る「眼力」をより複雑に、的確にしてくれる一冊。　/古谷

03 『右傾化する日本政治』

政治

中野晃一 著

岩波新書
2015年

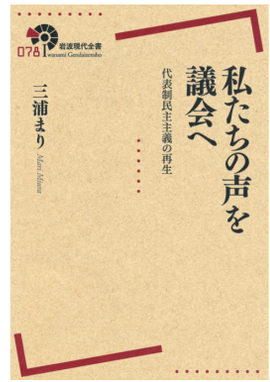
“二〇年以上前に「政治の自由化」として始まった新右派転換が、いつしか今日の「反自由の政治」をもたらしたプロセスを解明することが本書のねらいである。”——p.26

憲法が蔑ろにされ、人々の生活が脅かされ、政府は民主的なプロセスを行使することさえ放棄している。2015年の夏何度も思った、「一体この国で何が起こっているのか」。本書はそのような問いに応えうるものの一つといえるだろう。ここでは、この国の政治がかつて標榜した「政治の自由化」が、現在行われている「反自由の政治」を生み出してしまった経緯について、丹念に眺められている。絶望的なこの社会のオルタナティブを考えるうえで、必読の書。 /信和

04 『私たちの声を議会へ—代表制民主主義の再生』

政治

三浦まり 著



岩波現代全書
2015年

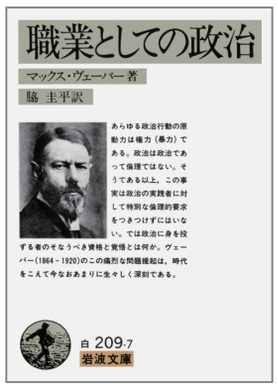
“私たちの生にまつわるあらゆる問題は政治の問題だ。”——p.200

なぜ私たちの声は議会へ届かないのだろうか、いかにしてこの状況を乗り越えればよいのだろうか。本書において筆者は、これらの問いに真摯に向き合う。選挙やデモだけではない、政治に声を届ける方法は様々にある。市民と政党との豊かなコミュニケーションこそが、代表制民主主義再生の鍵となる。政治とは政治家だけでなく、お金持ちのエリートだけでなく、この国に暮らすすべての人のものだ。これは、紛れもないあなたの話なのだ。 /塩田潤

05 『職業としての政治』

政治

マックス・ヴェーバー 著 / 脇圭平 訳



岩波文庫
1980年

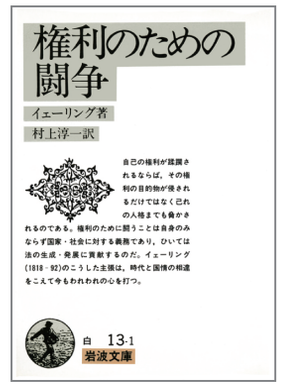
“どんな事態に直面しても「それにもかかわらず（デンノッホ）！」と言い切る自信のある人間。そういう人間だけが政治への「天職（ベルーフ）」を持つ。”——p.106

本書はヴェーバーが1919年に青年たちに行った講演をまとめたものである。当時の青年たちは第一次世界大戦後という混迷の時代の中で、新たな「指導者原理」や世界観を渇望していた。しかしヴェーバーは直接的な答えは示さず、政治とは何かを語り始める。政治行為の原動力は権力（暴力）である。ゆえにそれを行使する政治家には倫理が必要になる。情熱と判断力を合わせ持ち、何があろうと責任を引き受け、決して挫けない人間こそ、政治へのベルーフを持つ。 /大庭

06 『権利のための闘争』

政治

イェーリング 著 / 村上淳一 訳



岩波文庫
1982年

“具体的な権利は抽象的な法から生命と力を受け取るだけでなく、抽象的な法にそのお返しをするのである。”——p.80

個人的に「権利」は、「法律によって決められた抽象的なルール」というイメージだった。実体のない、空っぽな理念だと。本書を読んだ。その実体なき権利感覚は、自分の生活が侵害されて、ようやく身体に刻まれるのだと。他者の不当な介入への怒り、苦しみの感情がその兆候であると。そして、理念は市民が現状を認識しようとする意思から初めて生まれるのだと。空虚な「権利」という言葉に価値を与えるのは、紛れもなく当の僕自身だったのだと学んだ。 /Dai

07 『政治的なものの概念』

政治

C. シュミット 著 / 田中浩 原田武雄 訳

未來社
1970年

“政治的な行動や動機の基因と考えられる、特殊政治的な区別とは、友と敵という区別である。”——p.15

道徳的なものは善と悪を、美的なものは美と醜を、経済的なものは利と害を区別して考える。では、政治は？　政治は友と敵を区別し、最悪の場合、殺しあう。政治こそが最も根本的な対立なのだ。そう言ったのは一時的にナチスに加担したシュミットだった。しかしそれは、無視していい過去の遺産ではない。政治的なものは未だに譲れないもの同士の戦いとして続いている。「敵」との対話可能性を探るために、まずシュミットと格闘しよう。シュトラウスの注解も併せて読まれたい。　/UCD

08 『自由』

政治

齋藤純一 著

岩波書店
2005年

“他者と彼／彼女によって生きられる「世界」は他（ユニーク）にないものであり、その「世界」は私たちが共有する世界から失われてはならない。”——p.119

「自由である」とはどういうことなのか。本書は、自由を個人的な問題ではなく、他者との＜間＞にある問題だと位置づける。まず近代における自由の議論から遡り、現代において自由がどう論じられているのかを説く。そして、自由と安全、自由と公共性など、現代において衝突、混合する概念を検証する。末尾には基本文献の紹介もあり、あなたが掘り下げたいことを深める用意もできている。名ばかりの「自由」がはびこるこの社会で、自由について改めて考えるための一冊。　/元山仁士郎

09 『〈私〉時代のデモクラシー』

政治

宇野重規 著

岩波新書
2010 年

“あなたは、誰と一緒に〈私たち〉を形成していますか。”——p.X

現代では社会関係の唯一の起点が〈私〉になっている。〈私〉は一人ひとりが強い自意識を持つ。しかし、社会全体としてみると似通っていて、誰一人特別な〈私〉はいない。どこかで不安や不満を抱えている〈私〉と、路上で声をあげる〈私〉。立場や理想の違いを越えて〈私〉同士が出会い、〈私たち〉の輪を広げる努力をすること。求められる民主主義のかたち。政治哲学の研究者である著者の、〈私〉と政治を結びつける新しい回路を模索する一冊。　/藤木耀

10 『ポスト・デモクラシー —格差拡大の政策を生む政治構造』

政治

コリン・クラウチ 著 / 近藤隆文 訳

青灯社
2007年

“不満の焦点を問題の本当の焦点に向けなおすことが必要だ。世界中で地域社会を破壊し、不安定な状態にしているのは、大企業と独占的な利潤追求行動なのである。”——p.178

デモクラシーの時代は終わった。今や多くの先進民主主義諸国で選挙システムは形骸化し、実質的には大企業が政治を動かし、その結果、経済格差の拡大と貧困化が進行している。悲観的でも何でもない、筆者が描くのはこの社会の確かなリアルだ。本書後半では、そんなリアルに抗するための政治プロジェクトにまで踏み込んで議論が展開される。冷静に現状を把握し、現実的な一手を打つ。その積み重ねこそが、デモクラシーを再起動させる。　/塩田潤

2

「憲法」を語る

2　「憲法」を語る

日本国憲法、と聞くと頭に浮かぶのは、たとえば「平和主義」や「基本的人権の尊重」かもしれない。この憲法を大事にしようと、戦後、多くの人たちが奔走してきた。しかし、この憲法を変えようという動きが、今の国会のなかで大きな力をもっている。私たちは改めて、「憲法」というものが何なのかを問われている。2015年、政治をにぎわせていたのは「立憲主義」という言葉だった。この10冊は、憲法と私たちの距離を近づけてくれるものだ。

11 『憲法主義―条文には書かれていない本質』

憲法

内山奈月，南野森 著

PHP 研究所
2014年

“憲法とは、時の権力者に「この憲法に従って行動しろ」と命令するものです。”――p.223

憲法学の研究者とアイドルとの授業構成での対談。

日本の政治で唯一国民が国家を制限できる法、憲法。憲法が絶対的である理由や、絶対的であるはずなのにその内容は解釈次第である不完全さ。立憲主義の定義や歴史、現状、過去の実例や、最高裁判所、内閣、国会と憲法との関係が丁寧に語られる。他国との比較によって、日本での憲法の独自性も分かりやすく書かれている。基本的な情報を知りたい、憲法に初めて触れる人にも分かりやすい一冊。　/Cocoro Tany

12 『憲法［第六版］』

憲法

芦部信喜 著；高橋和之 補訂

岩波書店
2015年

“民主主義は、単に多数者支配の政治を意味せず、実をともなった立憲民主主義でなければならないのである。”――p.17

行間を読む。日本国憲法の行間を。憲法は国民の権利であり、その権利の在り方は憲法の条文とその行間の読み方で決まってくる。そして、行間の読み方を権力が時代を理由に思うままに変えていくことは出来ない。だから、「解釈改憲」反対の声が全国に溢れた。もう一度、土台から憲法を捉える。憲法の原理と用いられ方、積み重ねられてきた読み方を学ぶことで。そして、自分の言葉でそれらを語り直し、あるべき権利を自分のものとして守っていく。　/いたる

13 『赤ペンチェック自民党憲法改正草案』

憲法

伊藤真 著

大月書店
2013年

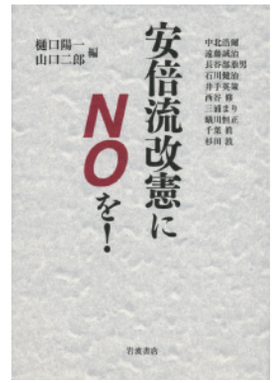
*“最初の問題
次のＡとＢは、どちらが正しいでしょうか。
Ａ 憲法は、国民が守るべき義務です。
Ｂ 憲法は、権力者が守るべき義務です。”——p.3*

「憲法」と聞いてあなたは何をイメージするだろうか。なんとなく、法律より上にあるものとか、９条とか。曖昧に感じてる人が多いかもしれない。そんな中、現自民党政権は憲法改正に躍起になって動いている。一体、どのように改正するのか。それによって何が変わるのか。本書は現行憲法と自民党の改憲草案とを比較し、問題形式でシンプルにそれを読み解いてくれる。「憲法改正」の動き。気になるけど、難しそうと思っているあなたにオススメの一冊だ。　/どっきょ

14 『安倍流改憲に NO を！』

憲法

樋口陽一，山口二郎 編



岩波書店
2015年

“言葉を無意味化することによって、権力は無限に暴走できるようになる。”——p.214

2015年、「積極的平和主義」「存立危機事態」「重要影響事態」等、これらの言葉が政治の世界に渦巻き、それに呼応した市民から多くの懸念の声が上がった。なぜなら、これらの言葉が従来の用法や明確な限界を持ち得ず、時の権力によって拡大適用される恐れがあるからである。

その時流に沿って書かれた本書は、現政権の「何が問題なのか」を多岐に渡って検証しているため、今一度現状を確認するのに格好の作りとなっている。　/KBTK

15 『集団的自衛権はなぜ違憲なのか』

憲法

木村草太 著

晶文社
2015年

“ということで、結論はこうだ。憲法を燃やすことは、国家を燃やすことである。”——p.125

「憲法守れ！」—こんなことを叫ばなければならない日がくるなんて、誰が想像しただろう。政府が行った解釈改憲は、「法的認識」を越えたものだ。今や市民は、立憲主義を蔑ろにして暴走する権力に歯止めをかける理性的な人間として、教養を求められるようになった。憲法学的見地からの著者の指摘の数々は、憲法を骨抜きにした法案に危うさを覚えて集った人々の、支えにも、武器にもなり得るだろう。

私たちが強くなれば、きっとまだ間に合う。　/しおり

16 『立憲主義について—成立過程と現代』

憲法

佐藤幸治 著

左右社
2015年

“われわれは、立憲主義を侮蔑し、「力」への信仰に走った国々によってあの第二次世界大戦という未曾有の悲劇が引き起こされたことを決して忘れてはならない”——p.11

この本は私にとって「立憲主義」を知るための道しるべです。古代ギリシャから続く歴史を辿り、現代世界においてどのような意味をもつかが描かれています。そしてそれは、「人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果(憲法97条)」なのです。憲法学の権威である佐藤先生の研究の集大成ともいえる本作品。過去に起こった悲劇の背景を忘れてはならないと警笛を鳴らしているようにも思えます。憲法改正問題でゆれる現代。今こそ手にとって欲しい一冊です。　/岡歩美

憲法

17 『憲法 9 条の思想水脈』

山室信一 著

朝日選書
2007年

“夢想であると嘲られ、蔑まれた議論が「現実」の問題点を明らかにし、「現実」の立っている基盤がはらむ問題点を掘り出してきたのではなかったろうか。”——pp.97-98

いくつもの流れを捉え、線として9条を見る。9条に現れている平和思想は戦後に生まれたポッと出の理想なんかではない。いくつもの思想と運動と戦争で失われた命への反省のなかから、具現化された結晶なのだ。そういった思想がとてももろいことを歴史が証明していることに気付くのと同時に、その思想の緻密さとそれを育んだ人々の努力にも気付く。そしてまた問われる。どのように私たちがこの思想を発展させ、後に生きる人に引き継ぐのか。 /いたる

憲法

18 『日本国憲法の誕生』

古関彰一 著

岩波現代文庫
2009年

“日本国憲法を生み出した力、それは決して国家対国家の、勝者対敗者の政治力学からだけではなかった。”——p.381

日本国憲法が「押し付けられた」ものであり、だからこそ「自主憲法」制定が必要だという言説が根強く存在している。では、憲法はどうやって制定されたのか、また俎上に上る「9条」がどんな背景によって生まれたのか、私たちはどれほどわかっているのか。戦後 71 年目の今、この国の憲法が変わるかもしれないその時に、私たちの国の憲法がどのように誕生したのかを知ることが、強い意味を持っています。単純な「押しつけ憲法論」に抗するために。そして本書は、そのための最上のテクストです。/JGJ

憲法

19 『憲法と沖縄を問う』

井端正幸 , 渡名喜庸安 , 仲山忠克 編

法律文化社
2010年

“光が強ければ強いほど影の色が濃くなるように、日米安保の黒い影は、沖縄の米軍基地の周囲で大きく広がっている。”——p.27

戦後、特に1972年に日本国憲法が適用されてから、沖縄は「日本国民」に問い続けている。平和的生存権、所有権、環境権、思想・良心・宗教の自由、学問の自由、地方自治……これら憲法に書かれている文言を。本書は沖縄の現実と日本国憲法との狭間を照射し、そのズレを浮き彫りにする。それは沖縄だけに留まらない普遍性を持つ。歪みながら癒着する「憲法体系」と「安保法体系」。この二つの法体系を持つ国に生きる者が、現実を直視し応えるための一冊。/元山仁士郎

憲法

20 『憲法とは何か』

長谷部恭男 著

岩波新書
2006年

“境界線はそれ自体が目的ではない。”——p.187

この社会に生きる私たちは、一人ひとり違う。私は私で、あなたはあなたでしかない。だからこそ、時に社会には対立や紛争が生まれる。しかし、たとえそうであったとしても、私たちは他者の存在なくしては生きていけない。互いの違いを認め合い、多様性に富んだ社会に生きるための知恵として、憲法や立憲主義は作り上げられてきた。単純な「護憲論」や「改憲論」ではなく、憲法や立憲主義の思想的背景を紐解くことで、筆者は根本から憲法を問い直す。 /塩田潤

3

「生活」から考える

3　「生活」から考える

一昔前まで、日本は「一億総中流」の国だと言われていた。しかし、現在、私たちの生活を覆っているのは、先行きの見えない不安だ。この社会に生きる人は今、6人に1人が相対的貧困のなかにあると言われている。非正規雇用が増えるなど働き方が不安定になっている。学費も高く、「自己責任論」が蔓延している。求められているのは、私たちの生活をめぐる政治や経済のあり方の抜本的な改革だ。あくまで日常に根ざしつつ、持続可能な社会へ向けた思考と行動のための10冊。

21 『生活保障―排除しない社会へ』

生活

宮本太郎 著

岩波新書
2009年

“生活保障とは何か。それは、雇用と社会保障をむすびつける言葉である。”――p.IV

現在日本には、非正規雇用やワーキングプアの増加、年金など社会保障制度の先細りなど、生活保障をめぐるさまざまな問題がある。こういった状況になって久しいためか、よい打開案も浮かびづらい。この本は他国の例を示したのち、それを日本にそのまま適用しようとするのではなく、日本の現状に合った形のビジョンを打ち出している。生活や将来に不安を感じる全ての人におすすめしたい本である。政治家によりよい社会を求めるとき、役に立つだろう。　/幸子

22 『反貧困―「すべり台社会」からの脱出』

生活

湯浅誠 著

岩波新書
2008年

“貧困は自己責任ではない。貧困は、社会と政治に対する問いかけである。”――p.220

貧困は、自己責任という言葉で語ることのできない問題である。自由に未来を選択できる状況の中で、自分の選択に対して責任を持つことは当然だ。しかし、貧困は違う。誰が望んで進学をあきらめるだろうか。誰が望んで奨学金を借りるだろうか。生活困窮者支援の現場で戦ってきた著者は、この国に広がる貧困問題の原因を統計と経験から論じ、政府がしばしば口にする自己責任論を丁寧に論駁する。貧困問題を一から学び、具体的な解決策を知るための一冊。　/ともか

23 『現代日本の生活保障システム―座標とゆくえ』

生活

大沢真理 著

岩波書店
2007年

“ユニバーサルな社会的包摂は、市場の暴走にたいする歯止めであるという以上に、市場経済そのものの存立を可能にする条件なのである。”――p.5

私たちの生活は、政府による社会政策や、家族、企業などのコミュニティ、非営利協同組織などによる様々な制度や慣行によって支えられている。本書は、日本の生活保障システムが、男性稼ぎ主を想定した一元的なものであることからくる様々な排除について指摘する。社会的包摂の実現は、社会の中長期的な成長の土台にもなる。この社会の現状をきめ細かく確認しつつ、どんな人にでも出番があり、やり直しができるユニバーサルな社会を構想する一書。 /信和

24 『健康で文化的な最低限度の生活』

生活

柏木ハルコ 著

小学館
2014年

“生活保護―「命を守る最後の砦」…その現場で今自分は、仕事をしているんだ―”――1巻p.62

生活保護をテーマに、ケースワーカーの視点からそのリアルを描いた漫画。保護対象はただのだらしない人？届け出なしに働いた高校生のバイト代は？言い訳して働かない奴は許せない？家族に頼れない事情がある？経済的にも、人間関係的にも貧困に陥った人の「最後の砦」、生活保護。 6 人に 1 人が相対的貧困にあるといわれる現在、その砦に押し寄せる人々の「生」は私たちの日常とどこかリンクする。現役ケースワーカーもお薦めの 1 冊。 /大澤 茉実

25 ブラック企業 2 『「虐待型管理」の真相』

生活

今野晴貴 著

文春新書
2015年

“ブラック企業問題は、一過性の問題ではなく、日本の企業社会の一部が変質し始めているという問題だ ”――p.158

今や日本社会全体に普及した「ブラック企業」。それはなぜ、いかにして生み出され、はびこるのか。前半には具体的な現場の労働相談の生々しい事例を交えながらその「戦略」が解説され、後半では社会全体が「ブラック化」している様が明らかになる。本書から私たちが学ぶべきは、日本の労働世界と「成長物語」の本質的転換が急務であり、それは働く者一人一人にかかっているということだ。民主主義の種は、今も私たちが働く「足元」に眠り続けている。 /OCI

26 『保育園義務教育化』

生活

古市憲寿 著

小学館
2015年

“そしてどうせなら、安全な国で、全ての子どもたちが質の高い教育を受けられる国で、子どもを育ててみたいと思わないだろうか。”――p.88

「#保育園落ちたの私だ」というハッシュタグが話題になりました。少子化という現実があるにも関わらず、今の日本は明らかに子どもを産みにくく、育てにくい国となっています。

本書は少子高齢化や子育て支援、生活保障をめぐる、驚くほど真っ当な入門書です。これまで私たちの社会は、子育ての責任の多くを「お母さん」に押し付けてきました。本書を読めば、子育てこそ、重要な政治的課題であることに気づくはずです。 /SOB

27 『老い衰えゆくことの発見』

生活

天田城介 著

角川選書
2011年

“老い衰えゆく当事者もその家族も、自らの自尊心やプライドを保持することを通じた生存のための闘いを、日々実践している。”——p.50

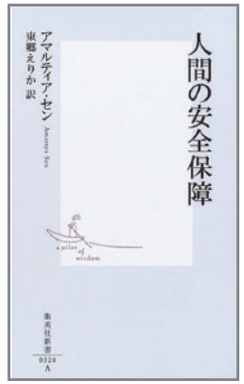
高齢化社会のなかで、介護をはじめとしたお年寄りとの付き合い方を他人事として語ることは難しくなっている。本書は〈老い衰えゆくこと〉を徹底的に見つめつつ、〈老い衰えゆくこと〉から戦後日本の社会制度を理解しようとする。

これまで「できる」はずだったことが「できない」ことになっていく過程。引き裂かれるプライド。抵抗のドラマ。それらを構成する戦後日本史。「多様な〈老い〉が、多様なまま生きることができる社会」へ向けて。 / SOB

28 『人間の安全保障』

生活

アマルティア・セン 著 ; 東郷えりか 訳



集英社新書
2006年

“この考え方は、国家の安全保障の概念とは対照的です。”——p.36

こんにち、私たちが議論し理解しようとしてきた安全保障は、はたして私たちの生活に根ざしているものだと言えただろうか。

人々の人権や生命、幸福のための安全保障の本質が、これまでの論議のなかではおざなりになっていたと、本書を読み進めていく中で感じざるを得ない。平等な基礎教育の必要性、他者や文化に対する寛容さを、いまこそあらためて社会に求めていく必要があるのではないだろうか。ぜひ現日本国憲法の理念とも照らし合わせて読み進めて欲しい。 /ゆいぽよ

29 『定常型社会—新しい「豊かさ」の構想』

生活

広井良典 著

岩波新書
2001年

“「ではどうすればいいのか？」——この問いを正面から考えていく必要がある。”——p.6

「成長」という目標の追求は、現代社会の人々の豊かさや幸福の源となっているだろうか。

「再分配政策を通じた成長」という構造ではなくパイの拡大＝経済成長とし、経済成長をナショナリズムとも関連させてきた戦後日本の文脈。福祉国家と経済成長は相反しない。市場への自由放任とケインズ主義的積極財政の対立とは「(経済)成長志向」という点では同じ土俵に立っている。現代日本の経済の思考を読みとき示される「ではどうすればいいのか？」 /和葉

30 『被抑圧者の教育学』

生活

パウロ・フレイレ 著 ; 三砂ちづる 訳

亜紀書房
2011年

“抑圧者、被抑圧者、双方の人間性を回復しようとするとき、その闘いは意味をもつ。”——p.23

第三世界で識字教育を行ったパウロ・フレイレの代表作である。生活保障の分野で 1 冊と言われ、まずこの本を思い浮かべた。 1968 年初版の本書における被抑圧・抑圧の関係は、現代を生きる私たちにあまりに身近だ。社会制度に変革が求められるとき、私たちはこの社会の抑圧者として、あるいは被抑圧者としてどのように現実を告発する言語・思考を獲得すべきか。いずれにせよ、それは果てしない人間化のための闘いであり、本書はその指南書である。 /大澤 茉実

4

「戦争」を棄てる

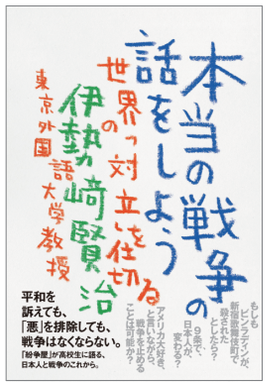
4　「戦争」を棄てる

おばあちゃんやおじいちゃんは、戦争は悲惨なことだと言った。学校の先生も、戦争はダメだと教えてくれた。でも、世界を見渡せば、今日もどこかで戦争が起こっている。人々が憎しみ合い、武器を手に取り、殺し合っている。どうして戦争は悲惨でダメなのに、無くならないのだろうか。どうして人々は武器を手放せないのだろうか。この10冊は、こうした疑問を考える上で有用なヒントを与えてくれる。一緒に「戦争」について考えてみよう。

31 『本当の戦争の話をしよう―世界の「対立」を仕切る』

戦争

伊勢崎賢治 著



朝日出版社
2015年

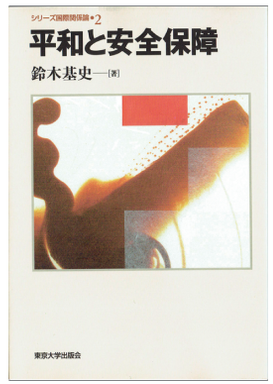
“日本の援助は、警戒感を与えず「誠意」として根付いている。９条のおかげかどうか知らないけど、日本の人畜無害性みたいなもの、それをもう少しポジティブに利用できないかな”――p.340

伊勢崎賢治さんは国連の職員として、紛争処理や武装解除に当たっていたという経験を持つ。この本ではそんな著者の経験から、どのように武装解除や紛争処理はなされるのか、実際の状況はどのようなものか、国連やアメリカの現場での本音などがつまびらかに、平易な言葉で語られている。またその上で、九条を保持し、唯一の被爆国である日本だからこそできる国際貢献の形が示されている。高校生に対しての講義録であるため読みやすく、幅広い視点をも含んだ実の詰まった良著。　/幸子

32 『平和と安全保障』

戦争

鈴木基史 著



東京大学出版会
2007年

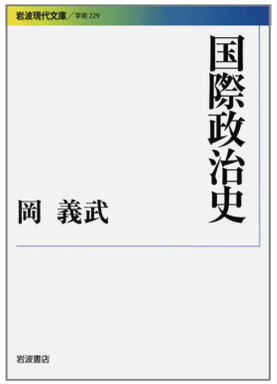
“変化する状況の中で現代国際関係を理解しようとする者は、進取の気性に富み、精緻な観察法や思考法を身につけるように努力しなければならない。”――p.244

主要な安全保障理論の論理を詳しく解説し、実際の国際政治の諸問題におけるそれらの理論の妥当性と問題を考察した一冊。抑止理論・勢力均衡論、国際制度論、平和構築論、民主的平和論など多岐にわたる理論を扱っており、安全保障を考える上で知っておかなければならない最低限の知識を網羅している。21世紀に入ってから、日本を含む世界の平和をめぐる情勢は大きく変わっている。そうした世界を理解する上で、本書は多くの視点と知識を与えてくれる。　/ユリヤ

33 『国際政治史』

戦争

岡義武 著



岩波現代文庫
2009年

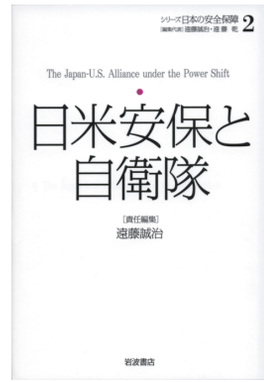
“外交の態様の変遷、外交を制約する国内的条件、国際労働者運動のごとき、その記述において全くふれられないかまたは触れられることの少なくなるのは、自然であろう。”——p.2

国際政治の推移を現象的な部分だけを切り抜いて考察するのではなく、その現象に潜む構造の変化に着目する。国家間の外交政策に国内政治が、そして市民の運動が影響を与えたことを歴史の中から示す姿勢は、私たちに社会への関わり方の意識の変化を生み出してくれる。冷戦を知らず、東アジアの緊張感が当然のように感じるSEALDsと同世代の若者に、広い国際政治史の中で現在を見つめる機会として是非お勧めしたい一冊。 /みつ

34 『日米安保と自衛隊』

戦争

遠藤誠治 責任編集



岩波書店
2015年

“安全保障のディレンマの克服から安定的な平和へ”——p.309

本書は日本の安全保障を多面的に分析し、安全保障環境が激変する中で、日本がとるべき安全保障構想を唱えている。日米同盟の変遷や、米国の世界戦略と「積極的平和主義」との相互関係等を詳らかにした上で、「積極的平和主義」が米国の世界戦略と齟齬を来しているだけでなく、東アジアを不安定化させている点を鋭く指摘している。そして、持続的で安定的な安全保障構想を打ち出している。日本の安全保障の将来を考える上で、示唆に富む一冊である。 /ユリヤ

35 『核兵器を禁止する』

戦争

川崎哲 著

岩波ブックレット
2014年

“核兵器は、国際法で禁止されていない唯一の大量破壊兵器である。”——p.16

核兵器は最も非人道的な大量破壊兵器だ。しかし、そんな兵器が現在も世界に１万５千発以上存在している。ヒロシマ・ナガサキの経験をもつ日本政府は「核兵器廃絶」を訴えながら、一方で国際的な動きである「核兵器禁止条約」には消極的だ。核兵器を是認するリアリストはこう言う—「抑止力として核は必要で、禁止条約は時期尚早でありユートピア主義だ」と。本当にそうだろうか？国際 NGO の現場で運動を続けてきた作者が「核なき世界」への " 現実的 " な道筋としての核兵器禁止条約を説明する。/ 斎藤雅史

36 『沖縄が問う日本の安全保障』

戦争

島袋純 , 阿部浩己 責任編集

岩波書店
2015年

“人間の尊厳を基盤にした安全保障は、単に、沖縄の現実を変革するために必要とされているわけではない。同時にそれは日本という国全体として模索していくべき安全保障のあり方を指し示すものとしてもある。”——p.13

シリーズ「日本の安全保障」（岩波書店）の第４巻である本書は、日本と沖縄の相克を沖縄の歴史、平和憲法、基地をめぐる諸問題、ジェンダー、アメリカ政治、国際法、沖縄の自律構想、東アジアの視点から説く本である。日本の安全保障において過重な負担が置かれている沖縄を基軸に据えるというパラダイムシフト的試み。「日本の安全保障」とは一体何なのか。沖縄は含まれているのか。いま、「日本人」がもう一度考え直すべき言葉を、直視しなければならない場所から問い直す。 /元山仁士郎

37 『戦争プロパガンダ 10 の法則』

戦争

アンヌ・モレリ 著 ; 永田千奈 訳

草思社文庫
2015 年

“戦争プロパガンダは「戦時中」だけではなく、「開戦前」から始まっているのだ。”——p.102

戦争なんか起こるわけがない。きっと全ての戦争はそうした前提から始まる。しかし歴史上の事実として戦争は繰り返されてきた。それを起こしてきた言葉には共通点があると、この本は１０の法則に纏めている。「我々は戦争をしたくはない」が、「敵側が一方的に戦争を望んでいる」。そして「この正義に疑問を投げかける者は裏切り者」だ、「愛国心がない」といって戦争は止まらなくなる。この国でまた「仕方が無く」戦争を起こさないため、その思考を止めないために、今こそ読まれるべき一冊。　/平葉

38 『〈テロル〉との戦争—9.11 以後の世界』

戦争

西谷修 著

以文社
2006年

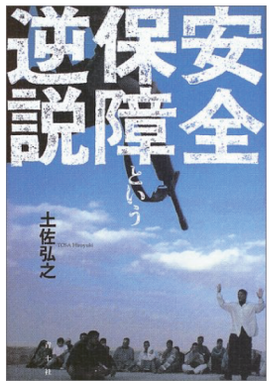
“「テロとの戦争」なるものを設定することで、アメリカは「戦争」を発動する国家が負うべきいっさいの責任を投げ出したのだ。”——p.103

アメリカ政府が9.11以降に始めた「テロとの戦争」を鋭く批判している著作。「テロリスト」は、たとえ何も起こしていなくとも、事前に排除しなければならない。「テロリスト」であれば、人権や人道的扱いせずに、どんな手段で殲滅しても構わない。そして、市民は常にテロに対抗しなければならない。本書はこうした「テロとの戦争」のレトリックの暴力性を暴き出している。10年以上前の著作ではあるが、昨今のテロを考える上でも示唆に富む内容である。　/ユリヤ

39 『安全保障という逆説』

戦争

土佐弘之 著



青土社
2003年

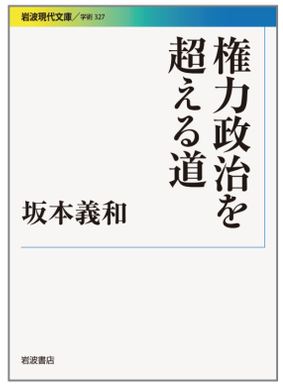
“主権国家という近代的制度、そしてそこに埋め込まれた領域的権力が、著しい人権侵害を行う凶器となりうるという当たり前のことを忘れないでおきたい”——p.6

昨年、安保法制を巡る議論において、しきりに平和や安全という言葉が使われた。「安全保障」と言うとき、必然的に国家が前提とされる。しかし、それは必ずしも私たち個人の「安全保障」ではない。国家は国家であるがために「敵」や「他者」を必要とし作り出す。そしてそのために平和や安全という言葉が使われる。本書は、従来の議論では不可視化されてきた、中央に対する周辺から「安全保障」を考えることで、新しい見方を私たちに提示してくれる。　/けんと

40 『権力政治を超える道』

戦争

坂本義和 著



岩波現代文庫
2015年

“国際政治の主体の最終的な単位として、国家を想定するということは、裏返していえば、国家と国家との間の国際関係は、一種のアナーキーの状態”——p.126

日本の戦後平和主義と憲法の繋がりを考える。権力政治を重視した軍事的な勢力均衡には「最悪事態主義」が常に付きまとう。最悪の事態を免れるための軍事的な措置は当然軍事競争を促進させ、想定される「最悪事態」は、より悪化する。不信感に基づいた駆け引きにより生まれる国家間の緊張関係を信頼によって払拭しようとする態度は、まさに日本国憲法の前文と重なるのだ。日本の平和主義に触れながら、改めて新しい世界の在り方を思考してみよう。　/みつ

5

「記憶」をつなぐ

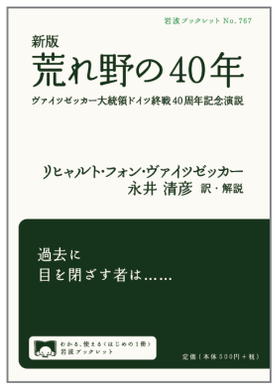
5　「記憶」をつなぐ

私たちよりも先に生きてきた人々の「記憶」をつなぎ、今を生きていく。それは、過去から受け取った守るべきこと、そしてまた目を背けてしまいたくなること、どちらも未来へとつないでいくことだ。過去から預かった、今私たちが享受している価値を、子孫たちがまた得られるように、そして同じ過ちを決してまた繰り返さないために。ここに選んだ10冊は、過去と向き合い、そして未来を開いていくための、記憶の道標だ。

41 『荒れ野の 40 年 —ヴァイツゼッカー大統領ドイツ終戦 40 周年記念演説』

記憶

リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー 述；永井清彦 訳



岩波ブックレット
2009年

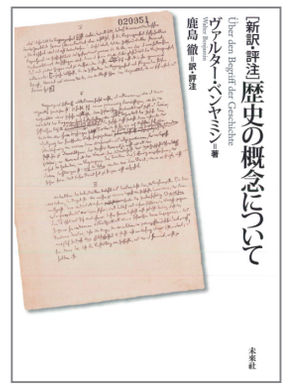
“しかし、過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目になります。”——p.11

ドイツが第二次世界大戦に敗れた40年後、「もう過去の傷を開きたくない」と口にして、「過去」の出来事に耳を塞ぎ目を閉ざそうとした人たちがいた。そんな空気に一石を投じたのは当時の大統領ヴァイツゼッカーによる終戦40周年演説だった。「過去」は「過ぎ去った」忘れていい出来事であってはならない。私たちが、そして私たちより前の世代の人たちが何をしたのかを学ぶこと、これが本当の意味で「未来」に向かって歩を進めることだ。　/まっしゅ

42 『[新訳・評注]歴史の概念について』

記憶

ヴァルター・ベンヤミン 著；鹿島徹 訳・評注



未来社
2015年

“わたしたちにはかすかなメシア的な力が付与されていることになる。過去はこの力が発揮されることを要求しているのだ。”——p.46

ナチスに追われ亡命していたその危機の中で、「歴史」について書き残されたこの著作を戦後７１年目のこの国でいま、この時に読むこと。それは現在の時が危機にある時には「過去」もまた危機にあり、そしてそれを救うことが出来るのもまた「いま」にいる「わたしたち」だと、気づかせてくれることだ。「歴史修正主義」と言われる政治状況に対して、わたしたちは過去に、歴史に対してどう向き合って行くべきなのか。その強いヒントをこの一冊は、素晴らしい、真摯な訳と共に与えてくれる。　/ 平葉

43 『批判的想像力のために ―グローバル化時代の日本』

記憶

テッサ・モーリス＝スズキ 著

平凡社ライブラリー
2013 年

“すなわち、『責任』は、わたしたちが作った。しかし、『連累』は、私たちを作った。”――p.67

この本は、九〇年代の終りから二十一世紀の変わり目にかけての、特に「歴史」をめぐる言説状況についての論集です。そして、右旋回を目の当たりにするグローバル化時代の現代において、「言葉」を思考するための必読書です。「ネオリベラリズム」、そして「虚無的ナショナリズム」は、この本が初めて世に出てから、むしろ悪化しているようにも見えます。「想像力の危機」に抗する、越境的な「言葉」の可能性について。 /SOB

44 『日本の政治と言葉〈上〉―「自由」と「福祉」』

記憶

石田雄 著

東京大学出版会
1989年

“一つの言葉が、いろいろな意味を持ちうる中で、なぜある場合に一つの意味が支配的であるかを、その社会的・歴史的文脈の中で明らかにすることが必要なのである。”――p.6

あなたにとっての「自由」の言葉の主体は「リベルテ（個人）」ですか、それとも「リバティー（権力に対する市民）」ですか。“ことば”が独立した道具ではなく、「いつ・だれが・どこで・なぜ」用いるかによって変化するものであることは、分かっていても意識しづらい。「自由」や「福祉」など普遍的な価値を持つ言葉が、日本の政治史の中でどう変化してきたのか。この視点をもつことは同時に、それぞれの時代にとっての「価値」を再認識することでもあるのだ。 / みつ

45 『沖縄戦が問うもの』

記憶

林博史 著

大月書店
2010年

“戦争責任をとるということは、言葉で謝るだけではなく、同じ過ちをくりかえさないように政治社会を作りなおすことではないだろうか。”――p.159

戦争の経過。死者数の羅列。戦場の名前。それだけでは重要なことが切り落とされるだろう。そこには、違う背景を持った他の誰でもない一人一人が存在したという事。その戦争でそういった「個人」の命や尊厳が奪われた事。唯一の地上戦が行われた沖縄戦。そこから学ぶべきは、軍や政府という「組織」が進めた戦争に、どのような「個人」が巻き込まれていったのかということだろう。それに対する想像力が同じ過ちをくりかえさないための社会を作る。 /いたる

46 『写らなかった戦後―ヒロシマの嘘』

記憶

福島菊次郎 著

現代人文社
2003年

“ドキュメンタリー写真は、人間の尊厳をいかに表現するかという行為であると同時に、レンズがいかにプライバシーを侵害するかという、二律背反によってのみ成立する両刃の剣である。”――p.23

「表に出ないものを引っ張り出してたたきつけてやりたい。」報道写真家、福島菊次郎の人間の生と向き合うことへの覚悟と執念を表している言葉だ。空がピカッと光ったあの日から、キノコ雲で覆い隠されたヒロシマとナガサキの街で、何が起きていたのか。「被ばく者」と一括りでは語ることのできない戦後を生き抜いた一人一人の生き様が映し出されている。これは、身体も心も蝕まれ、国に裏切られたとしても、命を燃やし続けた人びとの生きた証である。 /さくら

47 『日本とアジア』

記憶

竹内好 著

ちくま学芸文庫
1993年

“日本人がアジアを主体的に考える日は、まだ来ていない。”——p.110

西欧の「自由」や「平等」という文化価値の非西欧への浸透は、植民地侵略といった武力を伴ってのものだった。それにより、その価値自体は弱くなってしまった。その弱さが「そうはいっても、こう」という二枚舌、つまり「平等」を唱えながらの搾取といったことを正当化している。どうしたら、「自由」や「平等」といった価値が、意味あるものとして力を取り戻し、全ての人のものになるのか。日本の「近代化」を再検討し、その方法を問い直す評論集だ。/ これつ

48 『戦争は女の顔をしていない』

記憶

スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ 著 ; 三浦みどり 訳

岩波現代文庫
2016年

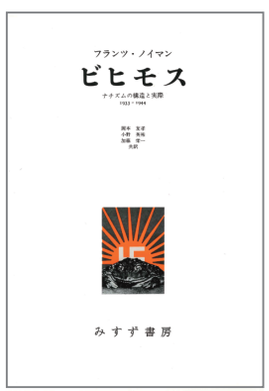
“伝えなければ。世界のどこかにあたしたちの悲鳴が残されなければ。”——p.480

第二次世界大戦時、ソ連では百万人を超える女性が従軍し、後方部隊のみならず兵士として武器を手に闘った。しかし戦後、彼女たちは黙秘した。理屈や祖国の英雄的歴史として戦争を語る男たちと違い、女たちは個人的で内的な体験や記憶として戦争を語る。そしてそれは、聞くに値しないものとされてきた。著者は、女たちの語る生の声を術として、戦争の暗闇の中に人間の本性を掴みとり、突きつけた。2015 年、その仕事はノーベル文学賞を与えられた。 / かりん

49 『ビヒモス—ナチズムの構造と実際』

記憶

フランツ・ノイマン 著 ; 岡本友孝 , 小野英祐 , 加藤栄一 訳



みすず書房
1963年

“もともと総統は単なる首相であった。もちろん彼はそれまでの誰よりも冷酷で、かつ 1933 年の全権委任法によってずっと強大な権力を持つようになった…”——p.78

「ナチスの手口に学べ」と、ある時この国の副総理は言った。世界一民主的な憲法だと言われたワイマール憲法がある日気づいたらナチス憲法に変わっていた、その手口を学べと。そしてその新しい憲法草案には、1933 年の全権委任法と同じく内閣に立法出来る権利を持たせる、国家緊急権が定められている。単なる首相が「総統」に変わってしまう前に私たちこそが、「ナチスの手口」を学ぼう。きっとこの第一級の研究書は、ナチスと同時代を生きた著者から渡された本だ。歴史を繰り返さないために。 / 平葉

50 『ホロコーストからガザへ —パレスチナの政治経済学』

記憶

サラ・ロイ 著 ; 岡真理 , 小田切拓 , 早尾貴紀 編訳

青土社
2009年

“復讐ではなく正義を追求しなければ。それしかないでしょう”——p.209

ホロコーストの被害者であるユダヤ人がなぜパレスチナ人を虐げるのか。そんな疑問から本書に出会った。戦後のユダヤ人にとってイスラエルこそが唯一安心できる場所だった。しかし同じくユダヤ人である著者はそのあり方に異議を唱える。彼女はなぜイスラエルを批判するのか、答えは強制収容所から生還した母の信念にあった。他者への寛容さ、批判することの大切さなどユダヤ教の教義に触れる中で、現代日本に住む自分自身の生き方をも考えさせられる。 / みき

6

「社会」のなかで

6　「社会」のなかで

現代の日本は「民主主義制」だ。つまり、社会のあり方を決めるのは有権者である国民だ。社会のあり方を決めるためには、当然、今、「社会」でなにが起こっているのかを知らなければならない。差別問題、エネルギー問題、経済格差、ジェンダー、そしてそれらを知るための自由など、この社会を考えるために知っておくべき事柄にこの10冊で出会える。これらの本が、あなたが選挙に行くときの参考になれば幸いだ。

51 『ぼくらの民主主義なんだぜ』

社会

高橋源一郎 著

朝日新書
2015年

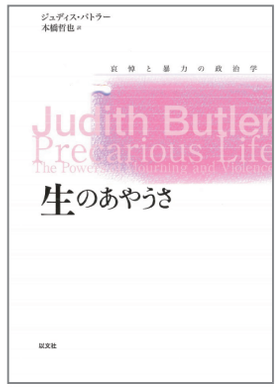
“ぼくたちは、ぼくたちの「民主主義」を自分で作らなきゃならない。”——p.254

私事だが、ここ数年納得のいく作品がつくれていない。しかし、迷いながらも路上でシャッターを切り続け、あらためて言葉や学びや知識に貪欲になり、そうして自らの表現に立ち返った時、巷の光景が少しずつ広がる気がした。恐らくは誰もが、迷い悩み、現実を疑い、信ずるべきものを手探りで求めている。それでもなお、真摯にこの現実と対峙し、思考し続けることが、私たちの人間性を回復し、民主主義を創造する方法でありチャンスなのだと本書が実践し、証明してくれている。　/ゆいぽよ

52 『生のあやうさ—哀悼と暴力の政治学』

社会

ジュディス・バトラー 著；本橋哲也 訳



以文社
2007年

“こうして人間が生まれていくのだ。何度も何度も、それがいったいどんな存在なのかを私たちはいまだ知りえないとしても。”——p.95

9.11と「テロとの戦い」以後、人命は悲嘆すべき死と価値のない死に振り分けられた。国家は哀悼を占有し、痛みを絶やすためにと、実際には暴力を増やしていく。そうすれば可傷性も否定した「自律的な主体」が保存されるかのように。しかし引き裂かれた私たちは、喪失の体験を共有することで人間へと帰り、出会い、別の未来に届く。台無しにしあうことさえ私たちの可能性なのだ。自主検閲と反知性主義に抗い、生への感覚を取り戻すための書。　/うめてん

53 『[新版]ブランドなんか、いらない』

社会

ナオミ・クライン 著；松島聖子 訳

大月書店
2009年

“もうひとつの世界の実現をめざす私たちは、自分たちが決して敗北者ではないことを知るべきだ。”——p.426

低賃金での労働、不安定な雇用契約、容赦のないリストラ……莫大な利益をその懐に流し込もうともくろむ企業らは、自らの利益追求のためならその手段をいとわない。わたしたちの生活の隅々にまで入り込んでくるブランド（企業）が、わたしたちの世界をいかに巧妙な手口を用いて奪い去っているかをこの本は教えてくれる。同時に、わたしたちがそうして広がる魔の手に対して無力なのではないこと、どう抵抗し、闘ってゆくべきかを示してくれる。 /ゆき

54 『現代奴隷制に終止符を！—いま私たちにできること』

社会

ケビン・ベイルズ 著；大和田英子 訳

凱風社
2011年

“日本は、世界でもっとも法律をよく守る国なのに、奴隷制のような深刻な犯罪の発生率が高いという事実をどう説明すればよいのだろうか。”——p.190

大好きな本、アクセサリー。気に入っている服、レストラン。それらを「誰が」作っているのか、「どうやって」運ばれてくるのか、私たちはほとんど知らされていない。誰かの命や人生を犠牲にしないと、私は幸せになれないんだろうか？と考えるようになった。大切な家族、猫、恋人、友達。思っていたよりも私には選択肢が、出来ることがあることを知った。だから、知ることから始めよう。私の生活をつくっているもの。私の生活がつくっているものを。 /和葉

55 『ネットと愛国—在特会の「闇」を追いかけて』

社会

安田浩一 著

講談社
2012年

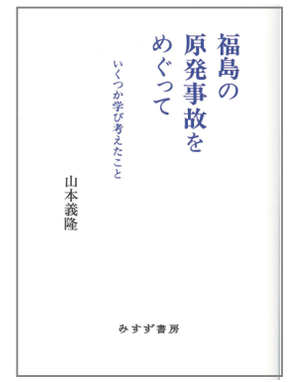
“在特会とは何者かと聞かれることが多い。そのたびに私はこう答える。あなたの隣人ですよ—。”——p.364

この本の前半には、在特会のトップの桜井の半生や、その他の会員の素顔や本音または在特会の起こした事件や「反在日」のルーツが書かれている。後半は離反する会員や、豹変してくるリーダー、広がっていく標的について書かれている。この本にでてくる登場人物に共感を持てる人もいるかもしれない。だからといって、ヘイトスピーチは許されるものではない。そしてこれがオリンピックを控えた日本の現状である。このヘイト問題も私達に問われている。 /リョウ

56 『福島の原発事故をめぐって—いくつか学び考えたこと』

社会

山本義隆 著



みすず書房
2011年

“福島原発の大事故は、自然にたいして人間が上位に立ったというガリレオやベーコンやデカルトの増長、そして科学技術は万能という十九世紀の幻想を打ち砕いた。”——p.91

福島の第一原子力発電所が大事故を発生させた時、当時の政治家や電力会社は口々に「想定外」と発言した。当然、原発は人間の扱える限界、つまり「想定」を超えている。放射性廃棄物は何世代にも渡って負の財産を残し、事故が起きればその周辺の土地は使いものにならなくなる。それにも関わらず、原子力＝「大国になるための条件」という幻想を抱きながら、原発に対する疑問を許さない空気を作り上げてきた。著者はそれを「原発ファシズム」であると批判する。/まっしゅ

57 『秘密保護法何が問題か—検証と批判』

社会

海渡雄一 , 清水勉 , 田島泰彦 編 ; 西谷修 [ほか] 執筆

岩波書店
2014年

“けれども、市民的権利がある限り、われわれは秩序を織り直すことができる。”——p.5

一番楽な選択＝難しい情報は全て賢い人に預けて任せること。のはずだった。原発事故が起きた。自分の置かれた状況を「知りたい」と思った。知って自分の行動を自分で決めたいと思った。秘密保護法が施行された。そもそも情報は誰のものだったのか、秘密保護法という法律によって、情報は自分の手から離れていくことになるのか。 結局、全ての情報を管理することは出来ない。 ただ、情報の在り方を私たちの手でもう一度決めていくことが出来るはずだ。 / いたる

58 『物騒なフィクション—起源の分有をめぐって』

社会

フェティ・ベンスラマ 著 ; 西谷修 訳・解説

筑摩書房
1994年

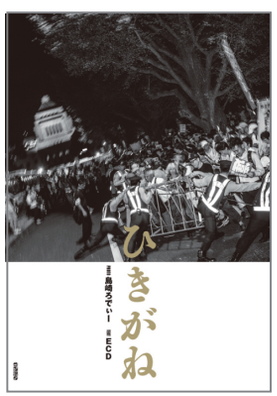
“そこかしこで人はこぞって声を張り上げた。だって、たかがフィクションではないか、と。”——p.34

チュニジア出身の精神科医で、現在パリVII大学教授の著者によってこの本が書かれたのは 1994 年。しかし 2016 年の今、ここに記された問題は一切古くなっていない。単なる「文学的フィクション」や「表現の自由」がなぜイスラームと衝突するのか。「西洋 VS イスラーム」という単純な図式ではなく、両者が拠って立つ「テクスト」という概念に着目して描かれるこの本は、シャルリ・エブドを嚆矢とする「テロ」事件、そして「原理主義」そのものを考えるために今こそ復刊され、読まれるべき本だ。 /JGJ

59 『写真集ひきがね—抵抗する写真 × 抵抗する声』

社会

ECD 文 ; 島崎ろでぃー 写真



ころから
2016年

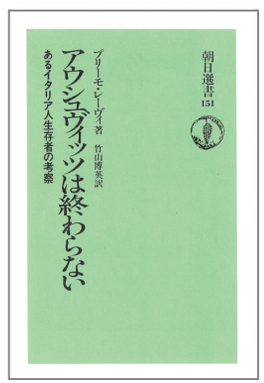
“デモの現場で育った「よりよき社会」は僕たちの大きな財産だと思う。僕たちは間違いなく強くなっている。”——p.132

この国の民主主義の最前線が記録されている。路上の運動から抵抗の声だけでなく人々の生の声が聞こえ希望を感じる。差別を阻止するために「奴らを通すな！」と路上に転がり込み阻止しようとする人々、国会前で安保法案に反対し「言うこと聞かせる番だ俺たちが！」と声をあげた SEALDs の学生などが写っている。3.11 の東日本大震災以降、この国の行く末を自らの行動で決めていく無名の個人がいること。この写真集はそれを記し、後世に伝えていく。 / ヤベシンタ

60 『アウシュヴィッツは終わらない —あるイタリア人生存者の考察』

社会

プリーモ・レーヴィ 著 ; 竹山博英 訳



朝日選書
1980年

“「なぜだ？」私は下手くそなドイツ語で尋ねた。「ここにはなぜなんて言葉はないんだ」男はこう答え、私を突き飛ばして中に押し込んだ。”——p.27

アウシュヴィッツには「なぜ？」という問いは存在しない。その応答である "reason"（理由＝理性）も。 逆に言えば、「なぜ？」という問いのないところに、アウシュヴィッツは生まれる。その土壌はいまなお、完全に消え去ってはおらず、この社会の中にある。われわれは、まずこのような悲惨があったことを真に受けよう。そして、想像の及ぶ限り想像しよう。人間が主体を奪われ、番号になってしまう前に、「なぜ？」という問いを発しなければならない。 /UCD

7

「未来」を創る

7　「未来」を創る

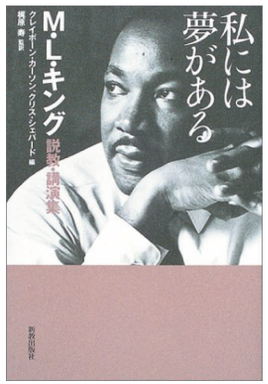
この国の、この世界の「未来」はどうなるのか？　このような問いは一見、夢想的だが、逃れられない問いでもある。一方、「未来」への問いの立て方はこれだけではない――この世界の「未来」をどうすればいいのか？未来を決めるのは、今を生きる私たちの仕事だ。

「そうぞう力」という言葉がある。未来を「想像」する力と「創造」する力を、この10冊から養うことができるかもしれない。

未来

61 『私には夢がある―M・L・キング説教・講演集』

マーティン・ルーサー・キング 著；
クレイボーン・カーソン，クリス・シェパード 編；梶原寿 監訳



新教出版社
2003年

*“私には夢がある。
／かつての奴隷の子孫とかつての奴隷主の子孫が、兄弟愛のテーブルに仲良く座ることができるようになるという夢が。”――p.103*

本書は「夢」の話だ。キングのスピーチは「DREAM」であって「PLAN」ではない。二言目には「対案をだせ」と言うこの国では伝わりにくいが、この夢は、アメリカの夢、人類の夢となった。過去の人々には「夢」だったことが、次の世代の「現実」を作り、また「夢」を完成させるために引き継がれていく。その繰り返しが歴史を作った。未だ、世界中で差別は無くならない。だが何度でも言おう。「今日も、そして明日も、様々な困難や挫折に直面したとしても、それでもなおまだ、私には夢がある」　/ 奥田愛基

未来

62 『永遠平和のために―啓蒙とは何か：他３編』

カント 著；中山元 訳

光文社古典新訳文庫
2006年

“「自分の理性を使う勇気をもて」”――p.10

題名を見て食傷めいたものを感じた。平和という言葉は、歴史の中で弄ばれ続けた結果、手垢にまみれ、陳腐な響きすら帯びてしまった。しかし、本書の中で使用されるこの言葉は、潔白で、危険に満ちて、瑞々しい。それは、お仕着せの決まり文句としてではなく、人類の肯定を目的に、カント自身が考え、紡ぎだした言葉だからだろう。彼は本書で、自ら思考することを説き、実践している。孤独な思考を通して、議論し合うための自分の言葉を産み出そう。　/ 黙字

63 『世界史の中のパレスチナ問題』

未来

臼杵陽 著

講談社現代新書
2013年

“イスラエル人であれ、パレスチナ人であれ、それぞれの立場から「平和」を求めているはずです。”——p.4

現代において最も深刻な民族紛争のひとつである、パレスチナ・イスラエル問題。これは単なる宗教対立ではない。世界が経験してきた歴史の縮図であり、近代国民国家が生み出した問題でもあり、また、差別とは何かを私たちに問いかけるものでもある。 パレスチナ・イスラエルが語る歴史はあまりにも重く、複雑で、今なお解決の糸口は見えてこない。しかしだからこそ、このことを踏まえた上で、現実を変えるために私たちは繰り返し考えていきたいのだ。　/ もえこ

64 『あの人と和解する』

未来

井上孝代 著

集英社新書
2005年

“あなたが誰かと和解したいと思ったなら、無理に相手を理解しようとしたり、わかろうとしないことだ。”——p.164

憲法十三条には「すべての国民は、個人として尊重される」と明記されているものが、自民党改憲草案では『個人』ではなく『人』に変わっている。この本からは、個人であることの大切さを感じることが出来ます。人はそれぞれみんな違っていい。その根本が理解出来たら「～べき」「～すべき」という言葉は減っていくのではないだろうか？違いを乗り越えるのではなく、違いを認める。違いを妥協するのではなく、同じ角度から見つめてみる。目では見えない部分への想像力、共感力、その必要性に気づかせてくれる本です。/ のどか

65 『「存在の現れ」の政治—水俣病という思想』

未来

栗原彬 著

以文社
2005年

“加害と被害の溶融という新しい地平から、人間であることに対する深い問いが生まれてきます。”——p.30

水俣の運動史から「存在」が現れ「新しい人間像」が浮かび上がる。中央と周辺に分かれた人々は、それぞれの立場からの視点で生を捉えようとする。視線が交差するグレイゾーンで踏みとどまると、お互いに一方的なこの視線が溶け合うような生が表れる。他者を支配する権力位置を離脱して、あるがままの人間として肩を並べて加害と被害のグレイゾーンを突破していく。オキナワ・フクシマにも通ずる“まなざし”をこの本から養いたい。　/ みつ

66 『独立国家のつくりかた』

未来

坂口恭平 著

講談社現代新書
2012 年

“路上生活者たちは単純に「生きるとは何か」について考えた。それは今では哲学と呼ばれているようなことかもしれない。”——p.43

「現実的に考えろ、食えなくなるぞ」—ならば実際に考えてみよう。あなたは素っ裸で東京のど真ん中に放りだされてしまった。さあ、どうしよう。死ぬしかないのか。しかしあなたはきっと考える。「どうやって生き抜こう」 真の思考の始まりだ。段ボールは家の材料になる。プラスチックケースはお風呂だ。路上で暮らす人々は実際そうやって生活してきた。彼らは生きる知恵を持っている。でも私たちだってそんな知恵を持っていたはずだ。布団が秘密基地だった、ビー玉が宝石だったあの頃。　/ 羽鳥涼

67 『一般意志 2.0—ルソー、フロイト、グーグル』

未来

東浩紀 著

講談社
2011年

“筆者は本書を「夢を語ろうと思う」という言葉で始めた。”——p.235

著者が再三繰り返すように、これは夢についての本である。民主主義にまつわる思想や哲学を、丁寧かつ平易に解説しながら、かつてルソーによって夢見られた「一般意志」という概念などに、現代において何を夢見ることができるかが模索されている。多くの夢と同様、それらは儚く、読み進めるにしたがって、無数の疑問を抱かされる。その疑問を切っ掛けに、読者自身の、民主主義についての夢想と思索が始まる。本書はその入り口へのよき案内人となる 。 / 黙字

68 『公衆とその諸問題—現代政治の基礎』

未来

ジョン・デューイ 著 ; 阿部齊 訳

ちくま学芸文庫
2014年

“私たちは、受け入れるべきひとつの事実として、関係という事実を手にしたまま相変わらず出発点に立っているのである。”——pp.32-33

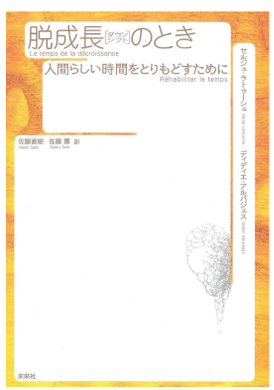
本書は、教育学者・哲学者として有名なジョン・デューイの国家論・民主主義論の代表的な一冊と言えるものである。

私たちは「国家」を語る時、その起源や本質を求めがちだ。しかしデューイにとってそれは、単一の起源や本質からでなく、人と人との「結合」、繋がりから国家を構想することだった。そして、しばしば問題視される「公衆」の「没落」についてのデューイの答えは、「もっと民主主義を」。今ここ、私たちから民主主義を始めよう。 /SOB

69 『脱成長(ダウンシフト)のとき —人間らしい時間をとりもどすために』

未来

セルジュ・ラトゥーシュ , ディディエ・アルパジェス 著 ;
佐藤直樹 , 佐藤薫 訳



未来社
2014年

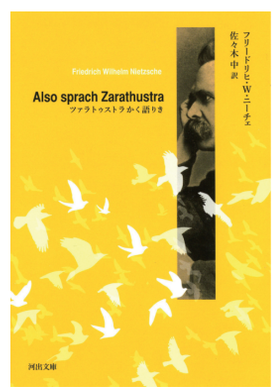
“自動車の総合平均速度は、毎時6kmを超えないか、歩く速度と大差ありません。”——p.73

人類は進歩したのだろうか。自動車の維持費を稼ぐのに必要な労働時間や、渋滞のときに待たされる時間などを全て考慮に入れた場合、自動車の総合平均速度は毎時 6km とのことだ。自転車に乗った方が速い。それに自動車がなくなれば、交通事故もなくなるだろう。それでもスピードが求められるのはなぜか？ それはもっともっと働くためである。長く働くために、より速い乗り物にのり、より性能のいいカミソリを使う。これを本末転倒というのではないか。 /UCD

70 『ツァラトゥストラかく語りき』

未来

フリードリヒ・W・ニーチェ 著 ; 佐々木中 訳



河出文庫
2015年

“勇気を失うな。それが何だというのか。多くのことが、まだまだ可能なのだ。みずからを笑うことを学べ。笑ってしかるべきように。”——p.164

去年、2015 年の 8 月、一番国会前に通いつめていた時期にこの新訳が出された。買ってから、夜に繰り返し読むことが多かった。ちゃんと読めている自信はないが、それでも強い力を受け取っていた。「未来の断片としての」私たちが、次に来る誰かのその「橋」になろうとすること。そうやって、今出来ることをやろうと思った。それはきっと、成功するとは限らない賭けになる。しかし、それに失敗したとしても、何度だってまた始めることが出来る。「これが生だったのか。よし、もう一度」、と。 / JGJ

8

「思想」を使う

8　「思想」を使う

思想は道具だ。それはわれわれに新しい視座を与える。まだ見ぬ世界の見取り図を。それはわれわれを窮屈な認識の隘路から解放し、ある問いを可能にする。「われわれは、この世界は、このままでいいのだろうか?」。考え抜こう、先人と共に。歩みはゆっくりとしか進まないが、そこからはじめて救済が、変革の可能性が生じる。いまこそゆっくり本を読もう。幾度となく立ち戻り、その度ごと背筋を伸ばしてくれる本を。このような時代だからこそ思想は大きな力をもっている。

71 『現代思想の教科書―世界を考える知の地平15章』

思想

石田英敬 著

ちくま学芸文庫
2010年

“私たちはどのようにして「自分自身の問い」として「自分がいま生きている世界」を問うことができるのか”――p.16

「現代思想」。とっつきにくそうな、何から読み始めればもわかりにくいその領域に、この本は最良の見取り図を与えてくれる。いま自分が生きるこの世界で、「私」の問いを考えるための地図を。過去に先人が考え残したことをとてもわかりやすく簡潔にまとめ、その上で今、考えるべきことの方向を示してくれている。この世界で生きることは勿論混沌に満ちていて、わからないことばかりだ。それでも、「考えること」は世界に形を見つけ、まだ一歩進ませる力を与えてくれる。その、始まりの一冊。　/JGJ

72 『ニーチェと哲学』

思想

ジル・ドゥルーズ 著 ; 江川隆男 訳

河出文庫
2008 年

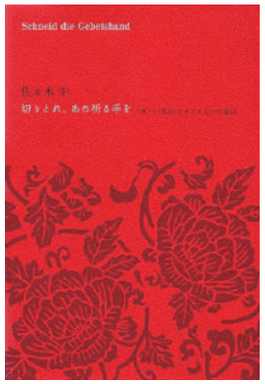
“肯定すること、それは軽くすることであり、(…)、生の価値であり、生を軽やかで能動的なものにする新たな諸価値を創造することである。”――p.357

SEALDs は個人を高貴なものにする一つの仮面である。われわれは一つの価値に埋没せず、反動的にならず、自分の無能力を嘆いたりしない。われわれは、苦悩を笑い飛ばし、この社会で遊び、ステップして踊ることで重くるしいものを軽やかにする。われわれの活動は、ルサンチマンからくるリアクションではなく、緊急のアクション、「〈実存の様式〉の能動的表現」である。SEALDs と共鳴する生の肯定の書。誤読かもしれないが、ヒントはこの本の中から得た。 /UCD

73 『切りとれ、あの祈る手を —〈本〉と〈革命〉をめぐる五つの夜話』

思想

佐々木中 著



河出書房新社
2010年

“何も終わらない、何も”——p.170

「革命の本体は文学である」 このことを、人生でもって示した偉人たちの五つの夜話。 彼らの長い闘いの記憶は、ある一人の男によって編集された。 突如、公に姿を現せた謎の作家、佐々木中だ。作中に登場するルターや、ムハンマドなど、彼らの革命の「祈り」は、彼らにとって知る由もなかったこの作家によって、僕らに届けられた。 ならば、現代はどうか。答えは次の文に如実に表されている。「取りて読め。 筆を執れ。そして革命は起こった。」 /Dai

74 『他者の苦痛へのまなざし』

思想

スーザン・ソンタグ 著 ; 北條文緒 訳

みすず書房
2003年

“あなたたちには理解できない。あなたたちには想像できない。”——p.127

日々膨大に流れる言語や写真、映像の情報を介して得る「他者の苦痛」。それらを目の当たりにし、反戦と平和、貧困や格差の是正、差別の撤廃を叫ぶ人々。そして目や耳を塞ぎ、傍観し、無用な批判や罵声を発する人々。けして誰も本当にはその苦痛をわかりはしない。本書は訴え、呼びかけ、問うている。私たちの失いかけた感受性を、想像力を、注意力を再び取り戻し、現状に抗い続ける意志を絶やしてはならない。いま、スーザン・ソンタグのいうラディカルの意味を自らに問い直したい。 /ゆいぽよ

75 『精神史的考察』

思想

藤田省三 著

みすず書房
1997年

“離脱の精神を含まぬ単純な『参加』主義は、『翼賛』という名に代表される左右大小さまざまの追従主義を生む。そのことは既に歴史が痛烈に教えている。”——p.256

「戦後日本の思想家」と聞かれて真っ先に思い浮かぶのがこの藤田省三である。 彼は「日本思想」の研究者であり、「高度成長期」という時代を見る思想家である。

キーワードは「経験」、平たく言えば事物・事態との相互交渉そのものである。 藤田は時代にそれを喪失させる「管理」の圧制を見た。「テロルとの戦争」、セキュリティという名の「治安」が叫ばれる現代、日本の思想から私たちは学ぶところがあまりに多い。 / 古谷

76 『人間の条件』

思想

ハンナ・アレント 著 ; 志水速雄 訳

ちくま学芸文庫
1994年

“そこで私が企てているのは大変単純なことである。すなわち、それは私たちが行っていることを考える以上のものではない。”——p.16

アレントは"thoughtlessness"（思考欠如）こそ現代の特徴だと言う。われわれはいったいなにもので、いつ、どこで、なにをしているのかを知らないし、知ろうともしない。知りたくもないから。だからわれわれは、知らない間に、なにか最悪のことに手を貸してしまっているのかもしれない。このような思考の欠如は何を生んだか。アイヒマンを、アウシュヴィツを、大量虐殺を生んだ。自らを知ろうとすることは、哲学は、役に立たないのか？否、それは最悪の事態を回避するのに役立つのだ。 /UCD

77 『明かしえぬ共同体』

思想

モーリス・ブランショ著；西谷修 訳

ちくま学芸文庫
1997年

“共同体は至高性の場ではない。それはおのれを露呈しながら他を露呈させるものである。共同体は、それを締め出す存在の外部を内に含んでいる。”——p.34

生きるということ、死ぬということ。とても個人的なことに思える。私の生を、私の死を、誰も代わってはくれない。しかし果たして、私は独り死ぬことができるだろうか。「私は死んだ」と言える人間はどこにもいないはずだ。私はせいぜい他者の死に立ち会うことしかできない。「私が考えることは自分独りで考えたものではない。」こう言ったバタイユのことを考え続けたブランショ。そのブランショを考え続ける私とは。まさにここに共同体は出来る。 / 羽鳥涼

78 『ロルティ伍長の犯罪 —〈父〉を論じる—ピエール・ルジャンドル第 VIII 講』

思想

ピエール・ルジャンドル 著；西谷修 訳

人文書院
1998年

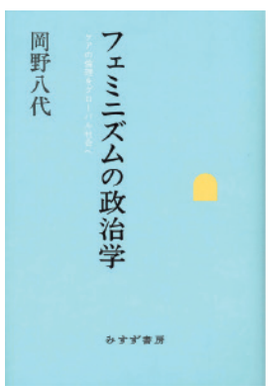
“「どうしてブツブツ言うの、パパ、気分でも悪いの？」。少し後で、瀕死の者の平手打ちを受ける前に、息子は父親の顔をしげしげと見る——何事も語らない顔を。これは現代の寓話だ。”——pp.235-236

全ての親は、もともと子である。子を産めば簡単に親になれるわけではない。親になるためには、まず自分が「自分はなんでもできて、なんでも要求できる」という子の立場を放棄して、大人にならなければならない。しかし、今の親はどうだろう。モンスターペアレンツのような全能性に取り憑かれたような親ばかりだ。そして、子としての要求を自分の子に押し付ける。叶わなければ平手打ちをする。何も言わずに。暴力は語らないのだ。その子はいったいどうなるのか。ドグマ人類学への入り口。/UCD

79 『フェミニズムの政治学』

思想

岡野八代 著



みすず書房
2012年

“一見すると個人的にみえる応答の仕方であったとしても、そこに社会変革への道が拓かれるのだ”——p.358

夫との不仲に悩む専業主婦の女性が、子どもの将来と、再就職への不安、両親の介護を考え、離婚を諦めた。近代的なリベラリズムの個人観に当てはめれば、彼女は「未熟で判断能力がない個人」である。 一方、「自立した個人」とされる夫は、妻のサポートを無自覚に享受する。私たちは、生まれてから死ぬまで誰かに依存し、他者のケアなしには生きられない。そのあまりに普遍的で、しかし大文字の政治学が忘れ去った大前提から社会構想を考える。 / 大澤 茉実

80 『カタストロフからの哲学 —ジャン＝ピエール・デュピュイをめぐって』

思想

渡名喜庸哲，森元庸介 編著

以文社
2015年

“デュピュイによると、「未来」の必然性というのは、まさしくカタストロフが必ず生じることを現実的だとみなすということである。”——p.87

いつかは地震が起こる——私たちは「知っていた」はずだ。しかし「信じられた」だろうか。専門家は言った——こうすればリスクを軽減できる。しかし起こってしまった今、「事情に疎い」私たちは感じている——それは起こらざるを得なかったのだ。だからこそ、私たちはこの災厄と向き合わねばならない。未来から過去へ告げ知らせなければならない。私たちはこれからくる破局の前夜にいるのだ。「市井の」思想家デュピュイの「賢明なるカタストロフ論」への案内に。 / 羽鳥涼

9

「子ども」と学ぶ

9　「子ども」と学ぶ

児童文学には、この世の輝きと暗闇が詰め込まれている。その重たさを手渡しながら、「だが、この世界は生きるに値する」と伝えようとする。

子どもだからといって、「戦争」は避けて通らない。その戦場は、貧困であったり、いじめであったり、自分を探すことだったり、人を信じることだったりもする。誰も助けてくれない。誰も助けられない。でも、同じように戦ってきた人たちはいる。その人たちの「戦争体験」に、知恵と勇気をもらいたい。

子ども

81 『びりっかすの神さま』

岡田淳 作・絵

偕成社
1988年

“――いいじゃないか、そんなこと。ぼくはきみにそばにいてもらいたいんだ。だから、びりになる。”――p.48

転校してきた四年一組の教室で、始が見たのは、透き通った男。それはびりっかすの ところにだけ現れる神様だった。

学校教育に競争原理を持ち込み、子どもたちを競わせ、教室や地域の中に格差をつくることに、いったいどんな意味があるだろうか？「もっとがんばれ」と言う大人の思惑とは裏腹に、「神様」を見たいがためにびりになることに夢中になる子どもたち。やがて彼らは、一番になるために頑張ることよりもっと大事なことを、教室の中で見つけていく。　/ 内山望

子ども

82 『ぼくはくまのままでいたかったのに』

イエルク・シュタイナー文；イエルク・ミュラー絵；
おおしまかおり訳

ほるぷ出版
1978年

“なにか だいじなことを わすれてしまったらしいな、とくまはおもった。はてなんだろう？”――p.32

冬眠から目覚めたクマは工場労働者と間違えられ、しだいに自分は人間だと思い込む。工場をクビになり森へ解放されほら穴をまえにしてもなお、クマであることを思い出せない。自我は社会との関わりのなかで常にアップデートされていくものだ。子どもらしくと言われれば子どもに、ママと呼ばれればママになる。この季節になると私たちは就活生とよばれ一様に黒のスーツに身をつつみ、時には自分を演じて面接にのぞむ。さて、そこに私はいるのだろうか。　/ 七田

83 『紅玉』

子ども

後藤竜二 文；高田三郎 絵

新日本出版社
2005年

“(持っていってくれ！取ったりんごくらいは、持っていってくれ！)”——p.29

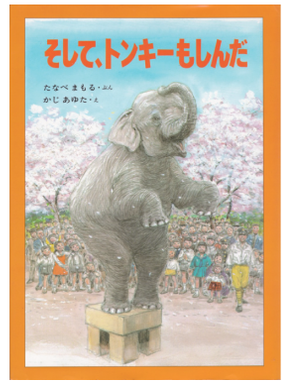
終戦の年、炭坑での強制労働から解放された中国人、朝鮮人たちが父のりんご畑にやってきた。復員兵の父は日本軍の略奪に目をつむった自分を思い出しながら、りんごを売って家族を養うんだ取らないでくれと頼む。すると骨と皮ばかり彼らはりんごを置いて静かに去っていった。

作者の父はりんごの季節になるとこの話を聞かせる。戦争が終わり人間性を取りもどす記憶。平和が揺らぐ今、そしてこれからの時代、私たちは人間性を守り続けられるだろうか。/ マサキ

84 『そして、トンキーもしんだ』

子ども

たなべまもる 文；かじあゆた 絵



国土社
1982年

“もう しんだことに なっている ぞうを いつまでも いかして おくことは できません。”——p.19

戦時中、上野動物園にいた三匹のゾウが餓死させられた。「空襲で檻が壊れたら危険だから」という理由ではない。この命令の本当の意味は、人気者のゾウを殺すことで、この国の全てを戦争に巻き込むことだった。戦争は、子どもだからといって、動物だからといって、避けては通らない。戦場に行く兵士だけでなく、あらゆるものに見えない軍服を着せてしまうのだ。例外はない。それは「大きな渦」だと、飼育員の小森さんは「絵本によせて」に書いている。 / かりん

85 『ぼんぼん』

子ども

今江祥智 作

岩波少年文庫
2010年

“——日本が敗けよった、言うたんやい。——どアホ。”——p.477

1941 年から敗戦までの、少年・洋の物語。父を失った彼を見守るのは、元やくざの佐脇さんだ。軍国主義の日本は「皇国の勝利のため、国民は皆、皇兵」という空気だが、少年の頭にさかんに明滅する広告の文言は「頑張るぞ、今年も！決意の戦場に仁丹あり」「逞しく玄米を噛みしめませう－歯を丈夫にするライオン歯磨」というばかばかしさ。が、その軽さには、私たちも覚えがある。小説だからこそ明確に伝わる軍国主義社会での細かな日常。大阪弁が魅力的。 / これつ

86 『ミリー—天使にであった女の子のお話—グリム童話』

子ども

ヴィルヘルム・グリム 原作；モーリス・センダック 絵；
ラルフ・マンハイム 英語訳；神宮輝夫 日本語訳

ほるぷ出版
1988年

“心は、なにものにもへだてられることなく、ほかの人の心にまでとどきます。”——p.4

戦地から離れて過ごしたミリーにとっての三日間は、戦地に残った母の過ごした 30 年間だった。私たちは偶然にも 1 日を 1 日とし、1 分を、1 秒を、誰に奪われることなく生きることのできる場所で過ごしている。あなたが愛する人と食事をし、笑い、眠りに就くまでの一日を、同じ命として生き残るために秒針が一つ先へ進む 86400 回分、命がけで過ごしている人たちがいる。どこかでそれを知りながら、私たちはまた今日「一日」を過ごしている。 / 紅子

子ども

87 『本泥棒』

マークース・ズーサック 著 ; 入江真佐子 訳

早川書房
2007年

“わたしは言葉を憎み、言葉を愛してきた。”——p.659

「言葉」で世界を征服しようとしたナチス政権下のドイツで、少女は「言葉」で尊厳を守ろうとする。少女の家に匿われたユダヤの青年は、『我が闘争』を白く塗りつぶし、愛の物語を書き込む。この人たちのことを私たちに語るのは、死神だ。連合軍がドイツの小さな町を空爆した日、少女と青年に尊厳と愛を教えた人々は殺された。書かれた「言葉」も失われたが、死神が拾いあげたのだ。この作品は、欧米で異例のロングセラーとなり、映画化もされている。 / これつ

子ども

88 『チポリーノの冒険』

ジャンニ・ロダーリ 作 ; 杉浦明平 訳

岩波少年文庫
1987 年

“「人間は、できるだけのことをしなくてはなりません。」と、クモはつつましく答えました。”——p.282

野菜と果物の国に暮らす、タマネギぼうやのチポリーノが、無実の罪で投獄された父親を助け出す冒険談。それはファシズムに抵抗し生き抜いた、イタリア市民の物語でもある。暴力と不正に満ちた理不尽な社会において、人間としてねじまがらないで生きるとはどういうことか。誰がファシズムを容認するのか。第二次世界大戦中、ファシズムに抵抗するレジスタンス運動に参加した作者は、この愉快な物語に、人間の持つ力と希望、そして課題を描いてみせた。 / かりん

子ども

89 『道はみんなのもの』

クルーサ 文 ; モニカ・ドペルト 絵 ;
岡野富茂子 , 岡野恭介 共訳

さ・え・ら書房
2013年

“「道はみんなのものだよ！」”——p.15

体を動かし、頭を使い、行動する生きた民主主義ってどんなものだろう？「公園をつくりたい」子どもたちの小さな願いから始まる物語が民主主義とは何かを教えてくれる。舞台はベネズエラの首都カラカス。工業化が進んだ町には子どもたちの遊び場はなかった。「道はみんなのものなのに ....」疑問から始まる子どもたちの小さな行動が、町を、人々を確かに豊かにしていく。民主主義はいつだってどこからだって始められる。足元からの民主主義をはじめよう。 / くるみ

子ども

90 『僕は、そして僕たちはどう生きるか』

梨木香歩 著

理論社
2011年

“僕を信じて付いてきた、あのニワトリを守り切れなかった。”——p.228

吉野源三郎『君たちはどう生きるか』は、盧溝橋事件の年に出た。軍国主義が社会を覆い、言論が弾圧されていくなか、子どもたちに向けて計画されたシリーズの一冊だった。この命がけの「君たちは、どう生きるのか」という問いを、著者は現在のなかに受けとめ、「僕は」「僕たちは」という主語を置いた。性暴力、個と集団、兵役拒否、開発と自然破壊などを織り込み、自ら魂を殺害し戦争に適応する人間の姿を丹念に捉えた。70年前と今が鮮やかに繋がる。 / かりん

10

「文化」を読む

10　「文化」を読む

「文化」の語源は「耕すこと」であると言われている。その通りに、本を読むことなど文化的な営みは、耕し、見えない種を蒔き、育てることに似ている。物語のある一節との出会いによってそれまで思いもよらなかった考えや行動が、あたかも芽が出るかのように生まれることは往々にしてある。それはまた、私と異なる他者との出会いの中で越境的な思考をすることでもある。その出会いは、私たちへの問いかけという種だ。そして蒔かれた種を育てること、それは私たちの仕事だ。

文化

91 『知の広場―図書館と自由』

アントネッラ・アンニョリ 著；萱野有美 訳

みすず書房
2011年

“つまり、優れた運営の公共図書館は、地域のソーシャル・キャピタルを豊かにする場所なのである。”——p.108

情報なんてググれば簡単に出てくるし、わざわざ本を読みに図書館行くぐらいならもっと楽しいことが世の中にはいっぱいある。では、なぜ図書館に人々が「集まる」ことが大事なのか。本書では、図書館がこれから求められるのは「屋根のある広場」としての機能である、と述べられている。民主主義はいつも広場から始まった。しかし今や人々が自由に気楽に集まれる場所が減ってきている。そんな中で、図書館の役割が改めて問われている。　/ まっしゅ

文化

92 『オリジンから考える』

鶴見俊輔，小田実著

岩波書店
2011年

“大きな人間を引っくり返すのは、小さな人間です。”——p.235

世の中は絶えず、世直しをしていかなければならない。その世直しをするのは、「小さな人間」だ。小さな人間とは、「デモクラシー」の語源「デモス（人々）」のことである。この本は、小田実の晩年の講演、未完の小説「トラブゾンの猫」、鶴見俊輔の講演、架空対談を収録している。「大きな人間」の横暴を是正し、社会を手入れしていく「小さな人間」の営みが、未来をつくる。ただの選挙主義ではない民主主義の中身を、豊かにイメージさせる言葉が詰まっている。　/ かりん

93 『文化 = 政治』

文化

毛利嘉孝 著

月曜社
2003年

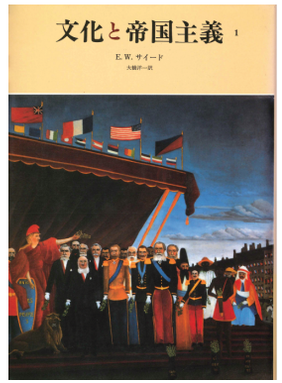
“警察の弾圧に対して、彼らが手にした武器は石やビンではなくカスタード・パイであった。”——p.118

「政治」と聞くとどのようなイメージを思い浮かべるだろうか。国会中継？ 国政選挙？ いやいや！「政治」とは歌をうたってダンスを楽しむ私たち自身の身近にある「文化」でもある。本来別のものと考えられていた「政治」と「文化」が結びつくことは従来のあの「政治」に大きな風穴をあけるだろう。私たちはあの夏国会前に集まった。授業の後、買い物の後、飲み会の後。堅苦しくてダサい「政治」はもううんざりだ。これからは私たちが「政治」を変えるんだ。 / まっしゅ

94 『文化と帝国主義〈1〉』

文化

エドワード・W・サイード 著 ; 大橋洋一 訳



みすず書房
1998年

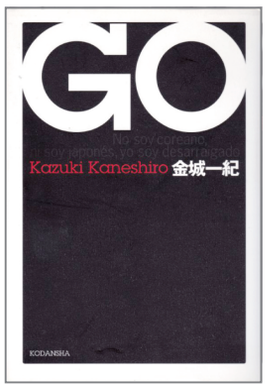
“いかなる文化も単一で純粋ではない。すべての文化は雑種的かつ異種混淆的で、異様なまでに差異化され、一枚岩的ではないのだ。”——p.26

「文化」という言葉を使う時、何が表されるのか？それは「私たち」と、「彼ら」を分けるものになってはいないか。文化が他者を排除するために使われて来てしまったことを見据えながら、この本はその力について問いかける。それは、この時代に生きる誰もが「重なり合う領土、絡まり合う歴史」の中で生きているということを知りながら、それでも「『私たち』についてだけではなく、他者について、具体的に、共感をこめて、対位法的に考える」こと。その想像力を私たちにもたらすものだ、と。 / 平葉

95 『GO』

文化

金城一紀 作



講談社
2000年

“言っとくけどな、俺は《在日》でも、韓国人でも、朝鮮人でも、モンゴロイドでもねえんだ。俺は俺なんだ。”——p.234

人は自分で生まれてくる場所は選べない。でも、どう生きるかは自分で決めるしかない。この本の事を簡単に言ってしまえば、「日本で生まれ日本で育った」《在日》というカテゴリーで呼ばれる青年の「恋の話だ」。本書を読んで、真昼間、東京のど真ん中で「良い在日も悪い在日も皆殺せ」とヘイトスピーチが叫ばれる日本で、もう一度考えてみて欲しい。「広い世界を見ろよ。後は自分で決めろ。」という彼は、僕と変わらないたった一人の人間だ。 / 奥田愛基

96 『動物農場—おとぎばなし』

文化

ジョージ・オーウェル 作 ; 川端康雄 訳

岩波文庫
2009年

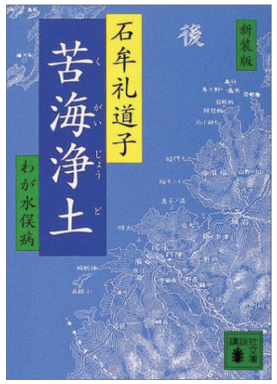
“すべての動物は平等である。しかしある動物は他の動物よりももっと平等である。”——p.161

主にスターリン体制をモチーフとして、全体主義や独裁のように、権力が暴走して行く様子が寓意的に描かれている。この「おとぎばなし」に登場するあらゆるものについて、我々は実際に人類が経験してきた具体的な事件や人名を思い浮かべることができる。読むに従い、権力の暴走を許しているものが常に、その権力によって支配される動物たち自身の無知であり、鈍感さであり、無関心であることに気付かされる。大衆としての彼らの姿に身につまされる。 / 黙字

97 『苦海浄土―わが水俣病』

文化

石牟礼道子 著



講談社文庫
2004年

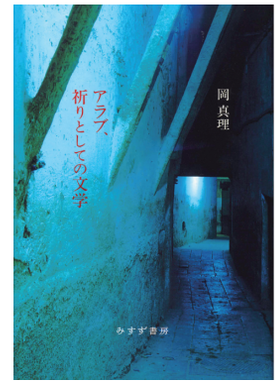
“おるがごつ、海のぶえんの魚ば、朝に晩に食うて栄華しよるもんが、なにが水俣病か――。”――p.68

一九六一（昭和三六）年。不知火海（八代海）に面し、はるか沖には天草諸島を望むその地にて、ある病が「発見」された。海と共にその地で暮らす人々は、工場排水に含まれるメチル水銀に毒された魚を食したことにより、次々と非業の死を遂げていった。記録やルポルタージュの域は超え出ている。本書は、著者石牟礼道子が「近代への呪術師」となるべく、いまだ故郷に立ち迷う死霊や生霊の言葉を背負い綴った、土地の匂いが濃く立ち昇る魂の文学である。 /KBTK

98 『アラブ、祈りとしての文学』

文化

岡真理 著



みすず書房
2006年

“小説を読んだ私たちは想像することができる、彼、そして彼女が私たちの友人であり兄弟であり姉妹として傍らにあるような未来を。”――p.311

世界が不条理に満たされている時に、文学は無力なのだろうか。本というものについて、少なくない意味を感じる者にとっては、一度は―あるいは、ずっと終わらない―問いに、アラブ文学者である著者は、その文学を読む中で問い続ける。そうして紡ぎ出される著者の真摯としか言う他ない言葉それ自体が、その応答に思える。どれほど望みのない状況であっても、文学は、人間が人間であるために存在し続ける、祈りのように。「世界に記憶されることのない小さき人々の尊厳を想い、文学は祈りになる。」 /JGJ

99 『想像ラジオ』

文化

いとうせいこう 著

河出書房新社
2013年

“亡くなった人の声に時間をかけて耳を傾けて悲しんで悼んで、同時に少しずつ前に歩くんじゃないのか。死者と共に”――p.141

あの日失われた多くの命。私たちはもう彼ら彼女らには出会えないのだろうか。何事もなかったかのように暮らしてゆかねばならないのだろうか。そうして他愛もなく話している時、私たちはふと気づく、こうして話している言葉を彼らも彼女らもまた話していたのではなかったか。私たちが言葉を話す、と同時に言葉が私たちを話させる。想像せよ。耳を澄ませば聞こえるはずだ。そして語り続けよ。未来のために。「想―像―ラジオ―」 / 羽鳥涼

100 『ヒップホップの詩人たち』

文化

都築響一 著

新潮社
2013年

“すべての芸術がそうであったように、ラップも「持たざるもの」によって生み出された。”―― p.594

15人のラッパーのインタビュー集。それぞれの日常の生活から書き溜められた言葉は、現代という時代をどんな詩人たちよりリアルに現している。路上で、郊外で、ステージの上で、彼らの日本語は「リリック」となる。 確かなことは、それまで誰でもなかった「誰か」が発した声に、何かを変える力があるということだ。そして同じ力が誰でもない「私」たちにはある。――言葉が。どれほど終わっている日常の中でも、こう言おう。「OK 余裕 未来は俺らの手の中」 /JGJ

11

SEALDs

11　SEALDs

SEALDs(Students Emergency Action for Liberal Democracy-s/自由と民主主義のための学生緊急行動)は、自由で民主的な日本を守るための、学生による緊急アクションだ。この102冊選書を終えるにあたり、私たち自身の本を入れることにした。私たちは学び、議論を交わし、選択を引き受け、路上に立って声を上げ続けてきた。ニヒリズムが蔓延し、「政治的中立」という言葉が手垢にまみれた現代において私たちが選んだのは、思考し行動すること。日常のなかで、少しずつ、でも確実に。

SEALDs

101『民主主義ってなんだ？』

高橋源一郎　SEALDs 著

河出書房新社
2015年

“学ぼう。ぼくたちはほんとうに無知だったと思うから。謙虚になろう。ぼくたちが知っている世界の外にはもっと広い世界があるはずだから。憎しみに巻き込まれないようにしよう。いちばん怖い敵はそれだから。”――p.8

作家で70年代安保運動に関わっていた高橋源一郎とSEALDsメンバーの、運動や、民主主義についての対談を収録。70年代以降パタリと学生が社会運動に関わらなくなった日本社会において、2015年の夏に現れた運動の意味とはなんだろうか。SEALDsの学生たちが考え行動する、その根幹にある思想が、古代から試行錯誤を繰り返してきた「民主主義」という文脈において語られる。読み終わる頃には、SEALDsが出てきたことは当たり前であり、必然だったと気付かされる。　/芝田万奈

SEALDs

102『SEALDs―民主主義ってこれだ！』

SEALDs 編著

大月書店
2015年

“この本をどうしても出したかった理由は、自分たちみたいにたった数人で、僕らの知らない街で何かを始めようとしている、ほかならぬ「あなた」に読んでほしかったからだ。”――p.5

社会を変えたくても、自分ができることでなければ、自分のやることでもない。社会に不安があっても、受け流せばいい。2015年の夏、安保法制にNOと叫んだ若者――SEALDsは、この閉塞感を破った。彼らは初めてデモをした。初めてトラメガを持った、コールをした、スピーチをした。初めて新聞やテレビに映った。希望と呼ばれ、馬鹿と呼ばれた彼らは、なぜ行動を起こしたかのか。「私」には何ができるのか。これはその闘いと葛藤の軌跡である。　/どっきょ

編集後記

この 102 冊選書のセレクトやレビューには「選書班」だけでなく、40 名以上に及ぶメンバーが関わっています。

前回、SEALDs 選書班では、「15 冊基本選書」を行い、「今、この国で起きていることを理解する」をテーマに、15 冊の本をレビュー付きで紹介しました。

今回はそこから枠を広げて、政治・憲法・生活・戦争・記憶・社会・未来・思想・子ども・文化の 10 テーマに 10 冊ずつとりあげ、SEALDs 本 2 冊を加えた 102 冊をあげています。どの本にしぼるか、半年をかけ、喧々がくがく議論を重ねました。

戦争のために人権を制限する社会ではなく、自由で民主的な社会を求めたい。民主主義を支えるために、一人一人が問題解決をはかる知恵を鍛えたい。自分とは異なる他者に理解を深め、異質共存できる世界を求めたい。その切実な思いから、私たちは本を選びました。

この世界には、自分とは違う他者がいます。その他者と出会うために、そして異質な他者を他者として受け止める、寛容な文化をこの社会に築くために、この選書が役立つことを願っています。

自由と民主主義のための学生緊急行動（SEALDs）
SEALDs 選書班

SEALDs

SEALDs(Students Emergency Action for Liberal Democracy-s ／自由と民主主義のための学生緊急行動 ）は、自由で民主的な日本を守るための、学生による緊急アクションです。担い手は 10 代から 20 代前半の若い世代です。私たちは、日本の自由民主主義の伝統を守るために、立憲主義・生活保障・安全保障の 3 分野で現実的なビジョンを打ち出し、従来の政治的枠組みを超えたリベラル勢力の結集を求めます。私たち一人ひとりの行動こそが、日本の自由と民主主義を守る盾となるはずです。

WEB サイト：www.sealds.com/
Twitter：@SEALDs_jpn
Facebook：SEALDs
SEALDsPOST：sealdspost.com/

#15 冊選書
SEALDs 選書班は、「今、この国で起きていることを理解する」をテーマに、昨年の9 月、15 冊の本を選書し、書店を中心に置いてもらいました。SEALDs の WEB サイトから、ダウンロードすることができます。

#102 冊選書選挙をひかえ、SEALDs 選書班は改めて、この国の政治、経済、社会、そして文化を理解し、「今を生き抜くための 102 冊」を、10+1 のテーマ別に選書しました。下記サイトから、ダウンロードすることができます。

URL: www.sealds.com/